群馬県前橋市

村　東　遺　跡

温水プール建設に伴う発掘調査報告書

1988

前橋市教育委員会
前橋市埋蔵文化財発掘調査団

序

前橋市は、北に赤城山、西に榛名山を望む関東平野の北部を市域とした県都であります。北から南に貫流する利根川の清流は「水と緑と詩の町」を潤し、かつては「糸の町」として養蚕製糸で栄えてきました。今、北関東一の人口28万を擁し生涯教育都市を目指し教育文化、商工業の調和のある街づくりが進められて、都市再開発事業、土地区画整理事業、前橋工業団地、住宅団地の造成事業など盛んに進められています。当遺跡の所在する総社町1877－１付近は昭和36年から前橋都市計画第１土地区画整理事業に隣接し、現今は民間開発が活発に進められ、その一つの温水プール建設工事用地が当村東遺跡であります。周辺には宝塔山古墳・蛇穴山古墳・総社町の石製鴟尾・上野国山王廃寺塔心柱根巻石など国指定の文化財も多く遺跡の宝庫とも言える地域であります。

調査は古墳時代中期から奈良・平安時代の住居址21軒と溝と堀跡２条を確認する他、数多くの出土遺物の中には完形品や復元可能な土師器、須恵器80点を検出できました。本報告書を刊行するにあたり建築主の大山芳孝氏を初め多くの方々から物心両面でのご協力戴き厚く感謝申し上げます。この報告書がこの地域の歴史解明の一助になれば幸いであります。

昭和63年３月

前橋市埋蔵文化財発掘調査団
団　長　　関　口　和　雄

例　　言

1．本書は都市計画法第29条の開発行為（温水プール建設事業）に先がけた開発予定地の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．発掘調査は前橋市教育委員会のもとに組織された、前橋市埋蔵文化財発掘調査団（団長　奈良　三郎）の委託を受け、スナガ環境測設株式会社（前橋市青柳町211－1　代表取締役　須永　眞弘）が実施した。

3．調査担当者　福田紀雄（前橋市教育委員会文化財保護係係長）
　　高橋正男（　　同　　上　　主任）
　　前原　豊（　　同　　上　　主任）
　　金子正人（スナガ環境測設株式会社埋蔵文化財調査部長）

4．遺跡名、所在地、調査期間及び調査面積は下記の通りである。
　遺跡名　　村東遺跡　略称　61A－17
　所在地　　前橋市総社町総社1877－1、1878、1879
　調査期間　発掘調査　昭和61年9月25日～12月4日まで実施した。
　調査面積　1,000㎡

5．本調査における出土遺物は、前橋市教育委員会に保管している。

6．本書はスナガ環境測設株式会社埋蔵文化財調査部が作成に当たり、編集総括を金子正人が当たり、白石光男が執筆と遺構のトレースを、版下作業を小林康典、遺物実測を佐々木智恵子・角田朱美、作業事務を柴崎信江が行った。

7．測量業務の指導監督は須永眞弘（測量士第52614号）が行なった。
　発掘調査の安全管理は荻野博巳が当った。

8．本調査に際して、多大なご協力を戴きました、開発行為者の大山芳孝氏や地元市民の方々並びに調査及び整理に際して種々と御指導、御助言を賜った各方面の方々に心より感謝申し上げます。

9．調査に参加した方々は次の通りであります。記して感謝致します。（順不同）
　新井恒喜、石川サワ子、大山　清、河西三明、加藤八重子
　門倉喜代美、小林康典、近藤充郎、田村友一郎、辻みつる
　中川きくよ、藤田光夫

凡　　例

1．遺構の略号

H－住居址　　D－土坑　　W－溝　　S－集石

2．実測図の縮尺

全体図1/300　住居址1/60（カマド1/30）　溝・集石1/60　　遺物実測図1/3

3．周辺図は国土地理院発行の２万５千分の１「前橋」を使用した。

4．遺跡の位置の基準　X＝44,891.00m　Y＝－71,290.00m（C－１グリット）

基準点、国土地理院の三角点及び水準点（BM　126.50m）

座標系　第IX系

方　眼　４m間隔

等高線　10cm

5．土層断面の土色名及び土器類の色調名は「新版基準土色帳」による。

目　　次

序

例　　言

凡　　例

目　　次

第１章　調査に至る経緯……1

第２章　調　査　概　要……1

1　調　査　方　法……1

2　基　本　土　層……1

3　周　辺　の　遺　跡……2

第３章　遺構と出土遺物……3

1　遺　　構……3

第４章　お　わ　り　に……9

出土遺物観察表……11

平面図……14

実測図（１～10）……29

図　版（１～16）……39

第１章　調査に至る経緯

都市計画法第29条「開発行為の許可」の申請が提出され、前橋市宅地開発指導要項（改正昭和58年前橋市告示第149号）第９条規定により、事業者と教育委員会が充分協議をはかり現地を試掘調査したところ、奈良・平安時代の集落跡を確認したもので、この工事によって、遺跡の現状保存が不可能な遺跡に対し全面発掘のうえ綿密な調査を実施し遺跡の内容、構造を把握するとともに、各種記録、写真撮影など行い記録保存を行うことになり、昭和61年10月６日より前橋市埋蔵文化財発掘調査団により調査が開始された。

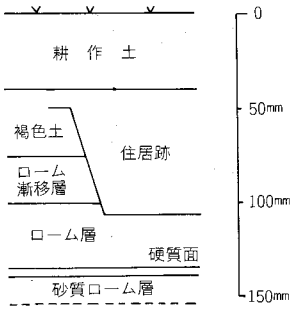
第２章　調　査　概　要

１．調査方法

前橋市教育委員会は事業者である大山芳孝氏の調査依頼を受け村東遺跡の試掘調査を行った。試掘方法は北と南側各２本づつのトレンチ（東西方向）と、西側に十字のトレンチ１本を設定し試掘を行った。地層は各トレンチで取り遺構は７ヶ所で確認した。その結果各トレンチから住居址・溝・土師器・須恵器等の遺構遺物が確認された為本調査を行うことになった。

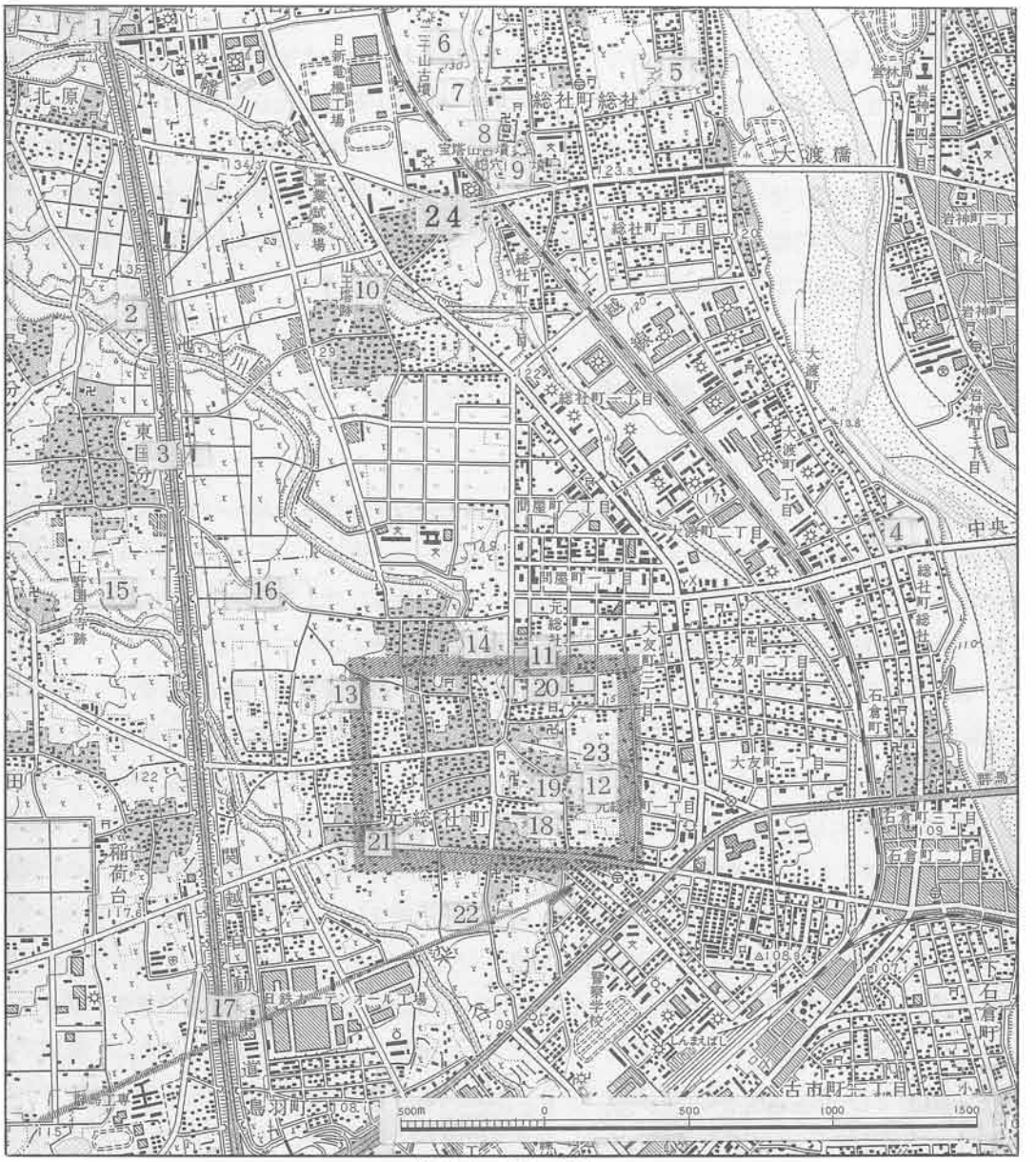
本調査は各トレンチを中心に行い調査面積は1,000㎡で昭和61年９月25日より12月４日まで発掘調査を行った。表土掘削の深さは50～60㎝の間で行いプラン確認後、測量基準を標高126.50m、座標をＣ－１地点でＸ＝44,891.00m、Ｙ＝－71,290.00m、Ｃ－６地点でＸ＝44,891.00m、Ｙ＝－71,270.00mに設定し、これを基準として調査区を北西隅より緯線をＡＢＣ……Ｎまで、経線を０１２……10まで各々４m幅のグリットで設定した。また各グリットの呼び方は北西交点を使用した。溝はトレンチと試掘にて方向、深さ、幅等を確認調査した。住居址はカマドを基準にベルトを設け土層観察を行った。カマドは残存状態のよいものは十字と「キ」の字に切り、それ以外は半裁し、土層観察を行いその後造り方を調査した。貯蔵穴、土坑は半裁し土層観察後完掘を行った。出土遺物は耕作土中のものは表採として取り上げ遺構に伴うものは遺構一括とし、重要であると判断したものは図面に記録後取り上げた。写真撮影は遺構全体上空写真等で行い使用フイルムは白黒、リバーサルで撮影記録した。

２．基本土層



第１図　基本土層

3．周辺の遺跡



第２図　周辺の遺跡

1	下東西遺跡	2	国分境遺跡	3	国分寺中間地域遺跡	4	王山古墳
5	遠見山古墳	6	総社二子山古墳	7	愛宕山古墳	8	宝塔山古墳
9	蛇穴山古墳	10	山王廃寺跡	11	閑泉樋遺跡	12	元総社明神遺跡
13	草作遺跡	14	上野国府域(推定)	15	上野国分僧寺	16	上野国分尼寺
17	鳥羽遺跡	18	元総社小学校校庭遺跡	19	寺田遺跡	20	閑泉樋南遺跡
21	天神遺跡	22	東山道(推定)	23	大友屋敷Ⅱ遺跡	24	村東遺跡

第３章　遺構と出土遺物

１．遺　　構

１号住居址（第４図、図版１）

調査区の北に位置し、Ｂ－４グリットに所在する。一部調査区域外であった。規模は長径4.4m短径2.8m、平面形は長方形を呈する。壁は６㎝前後掘り込んで床面に達し、床面積は12.3㎡を測る。柱穴は確認されなかった。住居址の主軸はＮ－90°－Ｅである。壁溝はカマドを除き一周していたものと思われる。カマドは東壁の中央部やや南寄りに位置しネンド製の支脚が検出された。出土遺物は奈良時代の遺物を中心に検出された。

２号住居址（第４図、図版１）

調査区の北に位置し、Ｂ－４グリットに所在する。本住居址は１号住址と重複関係にあり、１号住が本住居を切っている。規模は長径3.0m短径推定3.0m、平面形は正方形を呈する。壁は11㎝前後掘り込んで床面に達し、床面積は9.0㎡を測る。柱穴は確認されなかった。住居址の主軸はＮ－80°－Ｅである。壁溝はカマドを除き一周していたものと思われる。カマドは東壁の中央部に位置する。出土遺物は貯蔵穴付近に多く、奈良時代の遺物を検出した。遺存状態の良好なものは坏・蓋の２点であった。貼付け突帯をもつ埴輪片１点が覆土中より出土している。

３号住居址（第８図、図版１）

調査区の北西隅に位置し、Ｃ－０グリットに所在する。４号住址と重複関係にあり本住居址のカマドが遺存している事から３号住居址の方が新しいと考えられる。規模は調査区域外が大部分を占めている為、確認時で推定長径2.4m、短径は不明である。平面形は長方形を呈すると思われる。壁は６㎝前後掘り込んで床面に達し、柱穴は確認されなかった。住居址の主軸はＥ－10°－Ｓである。壁溝は確認されなかった。カマドは東壁の南寄りに位置する。出土遺物はそれほど多く検出されなかったが、奈良時代の遺物の破片と用途不明の鉄製品１点が出土している。

４号住居址（第８図、図版１）

調査区の北西隅に位置し、Ｃ－１グリットに所在する。本住居址は３号・５号住居址と重複関係にあり、カマドの遺存状況から５号住→４号住→３号住の順に古いと考えられる。規模は長径約3.3m、短径約2.4m、平面形は長方形を呈する。壁は８㎝前後掘り込んで床面に達し、柱穴は確認されなかった。住居址の主軸はＥ－５°－Ｓである。壁溝はカマドを除き１周していたものと思われる。カマドは東壁のやや南寄りに位置する。出土遺物はそれほど多く検出されなかった。奈良時代の土師器の破片が検出された。遺存状態の良好なものは坏１点であった。

5号住居址（第8図、図版1）

調査区の北西隅に位置し、C－2グリットに所在する。本住居址は4号・8号住居址と重複して居り平面的な切り合い関係は明瞭ではないが、カマドの残存状況から8号住→5号住→4号住の順に古いと思われる。規模は長径4.3m、短径3.1m、平面形は長方形を呈する。壁は6㎝前後掘り込んで床面に達し、柱穴は確認されなかった。住居址の主軸はE－3°－Sである。壁溝は確認されなかった。カマドは東壁の南寄りに位置する。出土遺物はそれほど多くなく、奈良時代を中心に破片が検出された。遺存状態の良好なものは坏1点であった。

6号住居址（第6図、図版2）

調査区の北東隅に位置し、C－7グリットに所在する。規模は長径4.2m、短径3.5m平面形は長方形を呈する。壁は36㎝前後掘り込んで床面に達している。柱穴は確認されなかった。住居址の主軸はN－72°－Eである。壁溝は確認されなかった。カマドは東壁の中央部に位置する。出土遺物は本遺跡で一番多く検出された。遺存状態の良好なものは、坏・高坏・甕等13点を数える。

7号住居址（第8図、図版2）

調査区の西側に位置し、D－1グリットに所在する。3号住居址と重複関係にあり、仮に3号住より本住居址が古いとした場合、3号住のカマドは残存しない位置にあることから7号住居址の方が古いと考えられる。又11号住居址との平面的重複関係は捉えられなかったが西側土層断面から7号住が古い事を示している。住居址の大部分が調査区域外である為規模は確認できず、唯一カマドだけが調査できた。壁は32㎝前後掘り込んで床面に達している。住居址の主軸はN－82°－Eである。カマドは東壁の中央部やや北寄りに位置する。出土遺物はカマド周辺から、坏類4点を検出した。時期的には奈良時代のものと思われる。

8号住居址（第8図、図版2）

調査区の北西コーナー寄りに位置し、D－2グリットに所在する。5号住居址と北西コーナーで重複しており新旧関係は5号住のカマドが遺存する事から5号住が新しいと思われる。規模は長径3.3m、短径2.6m平面形は長方形を呈する。壁は5㎝前後掘り込んで床面に達し、床面積は約8.58㎡を測る。柱穴は確認されなかった。住居址の主軸はE－10°－Sである。壁溝は確認されなかった。カマドは東壁の中央部やや南寄りに位置する。出土遺物はそれほど多くなく、遺存状態の良好なものは宝珠を有す蓋が検出された。時期的には古墳時代後期から奈良時代かと思われる。本住居址で特記すべき事として下部に炭化物の付着がみられる鉄滓と鎌と思われる鉄片各1点が出土している。

9号住居址（第13図、図版３）

調査区の北西に位置し、Ｄ－３グリットに所在する。13号住居址と重複関係にあり、切り合いは土層断面から９号住が新しいと考えられる。規模は長径約4.2m、短径3.3m、平面形は長方形を呈する。壁は20cm前後掘り込んで床面に達し、床面積は約13.86m²を測る。柱穴は確認されなかった。住居址の主軸はＥ－15°－Ｓである。壁溝は確認されなかった。カマドは東壁の中央部やや南寄りに位置する。出土遺物は比較的遺存状態が良く、Ｈ９－１は奈良時代の坏、Ｈ９－２～Ｈ９－５は本住居址掘り方調査中に土坑から検出された物で古墳時代中期の遺物である。

10号住居址（第５図、図版３）

調査区の北側に位置し、Ｄ－４グリットに所在する。規模は長径3.3m、短径2.9m、平面形は長方形を呈する。壁は20cm前後掘り込んで床面に達し、床面積は約9.57m²を測る。柱穴は確認されなかった。住居址の主軸はＥ－５°－Ｓである。壁溝は確認されなかった。カマドは東壁の中央部に位置する。出土遺物は少なく、僅かにカマド脇から蓋が検出された。時期は奈良時代の遺物であると思われる。

11号住居址（第16図、図版３）

調査区の北西に位置し、Ｅ－１グリットに所在する。住居址の半分は調査区域外であるため規模については明確さを欠く一辺は4.6mであり他方は確認できない、平面形は７号住と僅かに重複し長方形を呈する。壁は30cm前後掘り込んで床面に達し、柱穴は確認されなかった。住居址の主軸はＥ－５°－Ｓである。壁溝は確認されなかった。カマドは東壁の中央部やや南寄りに位置する。又、カマド脇に貯蔵穴を有す。出土遺物は埦・坏・蓋・壺など７点を数える。時期的には奈良時代の遺物が検出された。

12号住居址（第13図）

調査区の北西に位置し、Ｅ－３グリットに所在する。13号住居址により切られており、新旧関係は本住居址の方が古いと思われる。規模は長径約4.4m、短径3.7m、平面形は長方形を呈する。壁は６cm前後掘り込んで床面に達し、床面積は約16.28m²を測る。柱穴は確認されなかった。住居址の主軸はＮ－80°－Ｅである。壁溝は確認できなかった。カマドは13号住により切られており不明である。また、住居址南西隅に約径70cm程のピットが確認された。出土遺物はほとんど検出されず、数点の破片のみであった。

13号住居址（第13図、図版３）

調査区の北西に位置し、Ｅ－３グリットに所在する。９号・12号住址と重複しており、土層断面から12号住→13号住→９号住の順になることが確認された。規模は長径は推定で3.5m、短径3.1m、平面形は正方形を呈する。壁は10cm前後掘り込んで床面に達し、床面積は推定10.85m²を測る。柱穴は確認されなかった。住居址の主軸はＥ－15°－Ｓである。壁溝は確認されなかった。カマドは東壁の中央部に位置する。出土遺物は、遺存状態の良いものは埦１点だけであった。時期的には、古墳時代後期～奈良時代前半頃の遺物と思われる。

14号住居址（第18図、図版４）

調査区の東側に位置し、Ｄ－６グリットに所在する。15号住址と重複関係にある、15号住を本住居址が切っており新しいと考えられる。規模は長径4.2m、短径9.4m、平面形は長方形を呈する。壁は25cm前後掘り込んで床面に達し、床面積は約39.48m²を測る。柱穴は確認されなかった。住居址の主軸はＮ－75°－Ｅである。壁溝は確認されなかった。カマドは東壁の中央部やや南寄りに位置する。出土遺物は坏・甕・坩等が検出され、遺存状態の良いものは８点でその他砥石・鉄器（刃物の先端部）・縄文の土器片等が出土している。時期は古墳時代後期から奈良時代にかけての遺物と思われる。

15号住居址（第18図、図版４）

調査区の東側に位置し、Ｅ－６グリットに所在する。14号住址と重複関係にあり本住居址の方が古い。規模は長径5.8m、短径5.4m、平面形は正方形を呈する。壁は７cm前後で掘り込んで床面に達し、床面積は31.32m²を測る。柱穴は確認されなかった。住居址の主軸はＮ－75°－Ｅである。壁溝は確認されなかった。カマドは東壁の中央部やや南寄りに位置する。また、カマド脇に径60cmの貯蔵穴を有す。出土遺物は坏・埦・甕等、遺存状態の良いもの８点を検出した。古墳時代の後期のものと思われる。

16号住居址（第21図、図版４）

調査区の西壁中央に位置し、Ｇ－２グリットに所在する。住居址の1/2は、調査区域外であるため、規模については正確さを欠く、一辺約４m、他方は不明、平面形は方形を呈すると思われる。壁は11cm前後掘り込んで床面に達する。柱穴は確認されなかった。壁溝は確認されなかった。カマドは北壁に付設された形跡が見られるが、出土遺物は比較的遺存状態の良い物３点を検出した。時期的には奈良時代のものと思われる。

17号住居址（第23図）

調査区の中央部に位置し、G－5グリットに所在する。調査区中央を走行する薬研堀によって住居址の中央部を切られて居り、住居址の外郭線のみ確認できた。規模は東西方向約4.5m、南北方向約4.5m、平面形は正方形を呈する。壁は約19cm掘り込んで床面に達し、床面積は推定20.25㎡を測る。柱穴は不明である。住居址の主軸はN－80°－Eである。壁溝は確認できなかった。カマドは東壁の南寄りに位置すると思われる。覆土中より埴輪片が出土している。

18号住居址（第24図、図版4）

調査区の西側中央部に位置し、H－4グリットに所在する。堀と溝により住居址中央を切られている。規模は長径不明、短径3.2m、平面形は長方形を呈する。壁は30cm前後掘り込んで床面に達する。柱穴は確認できなかった。住居址の主軸はN－80°－Eである。壁溝はカマドを除き1周している。カマドは東壁の中央部に位置する。出土遺物は坏7点を検出した。時期的には奈良時代と思われる。

19号住居址（第7図、図版5）

調査区の南側に位置し、I－5グリットに所在する。本住居址は北西隅から南東方向に溝で斜めに切られている。規模は長径約4.3m、短径約3.0m、平面形は長方形を呈する。壁は40cm前後掘り込んで床面に達し、床面積は約12.9㎡を測る。柱穴は確認されなかった。住居址の主軸はN－85°－Eである。壁溝はカマドを除き1周していたものと思われる。カマドは東壁の中央部やや南寄りに位置する。又、径60cm程の楕円形の貯蔵穴を有す。出土遺物は坏・埦等、遺存状態の良いもの5点を数えた。時期的には平安時代と考えられる。

20号住居址（第29図、図版5）

調査区の南西壁ぎわに位置し、K－3グリットに所在する。住居址の大半が調査区域外であるため規模に付いては明確さを欠く。規模は一辺は2.5m、他方は不明、平面形は方形を呈すると考えられる。壁は30cm前後掘り込んで床面に達し、柱穴は確認されなかった。住居址の主軸はN－80°－Eである。壁溝は確認されなかった。カマドは東壁の中央部やや北寄りに位置する。出土遺物は坏1点であった。時期的には奈良時代と思われる。

21号住居址（第26図、図版５）

調査区の南に位置し、Ｋ－４グリットに所在する。規模は長径3.6m短径2.2m、平面形は長方形を呈する。壁は11cm前後掘り込んで床面に達し、床面積は7.92m²を測る。柱穴は確認されなかった。住居址の主軸はＥ－40°－Ｓである。壁溝は確認できなかった。カマドは東壁の中央部やや南寄りに位置する。出土遺物は坏・埦・壺・甕等、遺存状態の良いもの11点を数える。時期的には奈良時代～平安時代にかけてのものが検出された。

堀（全体図と第31図　図版６）

本遺構は調査区をほぼ東西に走行し17号住居を切っている。長さは調査区域内で約26mを測る。確認面での上幅は2.2m、下幅は1.8m、その底は更に幅80cm深さ60cm、全体の深さは約2.4mの薬研堀である。中段付近は崩落により深くえぐられている。出土遺物は、瓦片が出土したが、流れ込みによるものと考えられる、本遺構との関連は薄い。時期的には中世以後の堀と考えられる。この地域は字名で大屋敷と言われ、古老の話に近年まで堀跡が見られたとの事である。この堀が総社町誌に見られる大屋敷に該当するかは今後の調査研究に待たねばならない。

溝（全体図と第31図　図版６）

本溝は調査区を南東から北西に走行し、19号住居を構築する時には既に埋められていた。長さは調査区域内で約21mを測る。確認面での上幅は約2.3mで下幅は約80cm、深さ約70cmを測る。立ち上がりは西側より東側の方が良く45°前後で直線的に立ち上がる。形状は逆台形を呈している。時期的には奈良時代（19号住居址）以前の溝と考えられる。

集石遺構（第32図　図版６）

本遺構は、調査区東南隅に位置する。現状では、石の大きさはにぎりこぶし大程で、丸みを持った川原石の集石である。又須恵器片を所々に含んでおり、集石の囲りは、遺構確認面よりも約20cm程高くなっていた。

以上の事から考えて遺構の一部と考えられるが確証出来るものは検出されなかった。本遺跡は総社古墳群に隣接することから、過去において古墳が存在していた可能性は充分考えられる。あえて言うならあば、古墳の裏込めの一部と思われるが、推測の域を脱し得ない。

第4章　おわりに

村東遺跡は榛名山系東南麓に広がる相馬ケ原扇状地より流下する河川群の１つ、八幡川右岸域の前橋台地上に形成された標高126mの微高地に所在する。遺跡東には総社城主秋元長朝により開発された天狗岩用水が流れ八幡川と合流し、滝川となり南流している。

本遺跡で調査確認された遺構は、住居址21軒、溝１条、集石遺構１基、中世の堀１条である。出土遺物はおもに古墳時代中期から平安時代初め頃までの遺物が確認されているが、特に古墳時代後期から奈良時代（７世紀後半～８世紀前半）にかけての遺物が多く出土している。確認された住居址のうち重複関係の住居を見ると１・２号住居址群、３・４・５・７・８・11号住居址群、９・12・13号住居址群、14・15号住居址群はカマドの残存状況から東から西へ、南から北方向へ住居の移動がなされたことが伺われる。住居址を仮にIII期に分類すると以下のように区分できる。

（Ⅰ期）古墳時代中期

Ｈ－15号住、Ｈ－16号住（２軒）

（II期）古墳時代後期から奈良時代初め

Ｈ－１号住、Ｈ－２号住、Ｈ－３号住、Ｈ－４号住、Ｈ－５号住、Ｈ－６号住、Ｈ－７号住
Ｈ－８号住、Ｈ－９号住、Ｈ－10号住、Ｈ－13号住、Ｈ－14号住、Ｈ－17号住、Ｈ－18号住
Ｈ－20号住　（15軒）

（III期）奈良時代から平安時代初め

Ｈ－11号住、Ｈ－19号住、Ｈ－21号住　（３軒）

以上であるが、Ｈ－12号住は出土遺物がほとんど検出されておらず区分範囲には含まれていないがＨ－13号住との切り合い関係より、古墳後期以前のものと考えられる。

次に、各期における住居址の新旧関係を考えると、以下の様になる。

Ⅰ期　　Ｈ－15号住→Ｈ－16号住

II期　　この時期においては、Ｈ－２→１号住、Ｈ－３→４→５→７→８号住は各々重複関係にあり、カマドの遺存状況から以上のように考えられる。

A　　群	→	B　　群
H－1, 2, 3, 4, 5, 8, 10, 14, 17, 18, 20号住		H－6, 7, 9, 13号住

Ａ群からＢ群への推移が考えられる。

Ⅲ期　H－11号住　－－－→　H－19, 21号住

以上、住居址の推移と新旧関係について述べてきたが、本遺跡では、7世紀後半から8世紀前半にかけ、住居が集中し構築されているが、それ以後平安期に入り、住居はあまり構築されていない傾向にある様だ。

本遺跡は、古代上毛野国の中枢地域に属す総社古墳群の中に位置し、特に古墳時代終末期の様相を呈す。宝塔山古墳、蛇穴山古墳に隣接しており時期的にも同時性が考えられるため、当遺跡に住んだ人々と、これらの被葬者の間には何らかの関係があったことは、確かであろう。また、近接する下東西遺跡において、掘建柱建物群や特殊形態の住居址が確認されており、総社古墳群の被葬者と直接的な関係があったと考えられていることから下東西遺跡と本遺跡の間にも関連性があったのではないだろうか。

なお、小範囲内ではあるが、本遺跡の住居址の推移が古墳時代の終焉とかさなることは興味深い一致であろう。

最後に本遺跡の発掘調査に際し御指導・御助言及び御協力戴いた方々に感謝すると共に、この報告書が今後の調査・研究の一資料として役立つことを期待しておわりと致します。

村東遺跡出土遺物観察表

法量の（ ）は推定値

番号	出土位置	種類	法量(cm) 口径	底径	器高	胎土・焼成	色調	器形の特徴	(外面) 整形	(内面) 整形	遺存備考	図版番号
1	H1－1	壺 須恵器	14.2		9.2	良・還元硬	灰色	肩部張る。	回転ヘラ削り。	叩き目	体部一部	
2	H2－1	蓋 須恵器	18.2		3.0	良・還元硬	暗灰色	短い返りあり。	回転ヘラ削り後ナデ調整。	回転ナデ調整	2/3欠	7
3	H2－2	甕 土師器		5.1		不良・酸化軟	明褐色	底部から直線的に立ち上がる。	縦位ヘラ削り。	横位ヘラナデ	1/2欠	7
4	H3－1	坏 土師器	14.4		6.2	良・酸化	明褐色	口縁部有稜。	横位ヘラ削り。	横位ナデ　暗文有	1/3欠	7
5	H4－1	坏 土師器	13.4		3.3	良・酸化	明褐色	底部丸底、口縁部立ち気味。	口縁部ナデ調整、体部ヘラ削り。	回転ナデ調整	ほぼ完形	7
6	H5－1	坏 須恵器	9.2		3.6	良・還元硬	暗灰色	口縁部は直線的に立ち上がる。	底部ヘラ削り、口縁部ナデ調整。	回転ナデ調整	一部残	
7	H6－1	高坏 須恵器	25.2	脚 13.0	8.7	良・還元	灰白色	盤皿に裾広の脚部貼付け。	坏部底部回転ヘラ削り。	口縁部回転ナデ調整、底櫛状用具でナデ調整	坏部2/3欠	7
8	H6－2	坏 土師器	11.1		3.7	良・酸化	褐色	丸底から湾曲気味に立ち上がる。口縁部内傾。	口縁部ナデ調整。体部ヘラ削り。	ナデ調整	ほぼ完形	7
9	H6－3	甕 須恵器	肩 8.0	3.7	基部 2.8	良・還元硬	灰色	注口にふくらみを持つ。肩部がはる。	底部回転ヘラ切り、体部回転ヘラ削り。	ナデ調整	口縁部欠	7
10	H6－4	坏 土師器	10.2		3.2	良・酸化軟	明褐色	底部丸底凹凸有、指頭圧痕有。	底部ヘラ削り、体部～口縁部指頭圧	指頭圧整形	完形	8
11	H6－5	壺 須恵器	14.8			良・還元	灰白色	肩部がはる、口縁部ハの字に外反。	口縁部ナデ調整。体部櫛状用具でナデ	口縁部ナデ調整 叩き目をナデ消し	2/3欠	8
12	H6－6	坏 土師器	10.0		2.8	不良・酸化	橙	丸底から湾曲気味に立ち上がる。	体部ヘラ削り。口縁部ナデ調整。	ナデ調整	1/3欠	8
13	H6－7	坏 土師器	10.5		3.0	不良・酸化軟	橙色	丸底から湾曲気味に立ち上がる。	体部ヘラ削り。口縁部ナデ調整。	ナデ調整	完形	8
14	H6－8	坏 土師器	10.8		3.0	不良・酸化軟	橙色	丸底から湾曲気味に立ち上がる。口縁部内傾。	体部ヘラ削り。口縁部ナデ調整。	指頭圧整形、ナデ調整	ほぼ完形	8
15	H6－9	高坏 須恵器	25.4	脚 13.0	7.6	良・還元	灰色	盤皿に裾広の脚部貼付け。	坏底部回転ヘラ削り。口縁部面取り	口縁部回転ナデ調整 体部叩き目有り	坏部2/3欠	8
16	H6－10	壺 須恵器	基部 10.2	5.0	肩 20.0	良・還元硬	暗灰色	盛り上がった小底部から肩部にかけ直線的に外反。	口縁部～肩部ナデ調整、体部平行叩き目、肩部櫛描文	内面全体に叩き目	頸部欠	8
17	H6－11	坏 土師器	10.3		3.0	不良・酸化	褐色	丸底で口縁部は内傾気味。	体部ヘラ削り、口縁部ナデ調整。	指頭圧整形、ナデ調整	ほぼ完形	8
18	H6－12	坏 土師器	9.6		2.9	不良・酸化	褐色	底部平底気味口縁部は内湾気味。	体部ヘラ削り。	指頭圧整形、ナデ調整	1/3欠	9
19	H6－13	壺 須恵器	基部 10.0		肩部 20.0	良・還元硬	暗灰色	底部丸底で体部は丸味を持つ、基部いびつ。	口縁部～肩部ナデ調整、体部叩き目	内面叩き目	頸部欠	9
20	H7－1	坏 須恵器	15.4	10.0	3.8	良・還元	灰色	広い底部から口縁部は開き気味に立ち上がる。	底部回転ヘラ切り調整、口縁部ナデ調整。	内面ナデ調整	口縁部一部欠	9
21	H7－2	坏 須恵器	12.8	8.8	3.8	不良・還元	灰白色	広い底部から直線的に立ち上がる。	底部ヘラ切り、口縁部ナデ調整。	内面ナデ調整	口縁ほぼ欠	9
22	H7－3	坏 土師器	12.8		3.3	良・酸化軟	明褐色	口縁部立ち気味に外反。	底部ヘラ削り、口縁部ナデ調整。	内面ナデ調整	完形	9
23	H7－4	坏 土師器	13.8		4.1	不良・酸化軟	明褐色	深い底部から湾曲気味に立ち上がる	底部ヘラ削り、口縁部ナデ調整。	内面ナデ調整	1/3欠	9
24	H8－1	蓋 須恵器	18.6		5.8	良・還元	暗灰色	内斜する返り有、ボタン状の宝珠有	回転ヘラ削り	内面ナデ調整	1/3欠	9
25	H9－1	坏 土師器	12.6		3.4	良・酸化	明褐色	口縁部直立気味に立ち上がる。 底部は丸底。	底部ヘラ削り、口縁部ナデ調整	内面ナデ調整	完形	9
26	H9－2	小型壺 土師器	10.0	13.4	10.0	不良・酸化	褐色	丸底から胴部に至り中央部で最大径を有す。	口縁部縦方向ヘラ整形、体部横方向ヘラ整形。	内面指による斜位の整形	胴部1/3欠	10
27	H9－3	高坏 土師器	17.0	脚部 12.0	16.0	良・酸化	明褐色	脚部中央張り気味平らな底部から外反。	脚部縦方向ハケナデ、坏部横方向ナデ調整	内面ナデ調整	ほぼ完形	10
28	H9－4	甕 土師器	17.2	6.0	25.4	良・酸化	淡褐色	胴中央部に最大径を有す。口縁部小さく外反。	ヘラによる斜位のナデ、口縁部ナデ調整	内面ヘラによる斜位のナデ	胴部1/3欠	10
29	H9－5	小型坩 土師器	6.4	2.5	8.2	不良・酸化軟	淡橙	丸く張った胴部より口縁部は直線的に外反。	肩部～口縁部ナデ調整、胴部ヘラ削り	内面ナデ調整	口縁部1/2	10
30	H10－1	蓋 須恵器	13.9		2.7	不良・還元軟	淡灰色	体部は薄く、短い返り有す。ボタン状宝珠。	体部回転ヘラ削り。	内面ナデ調整	完形	10

番号	出土位置	種類	法量(cm) 口径	底径	器高	胎土・焼成	色調	器形の特徴	(外面)整形	(内面)整形	遺存備考	図版番号
31	H11－2	坏 須恵器	13.3	7.3	3.8	良・還元	灰色	底部回転糸切り調整。	口縁部ナデ調整。	内面ナデ調整	ほぼ完形	10
32	H11－3	坏 須恵器	13.4	9.0	3.5	良・環元硬	灰色	底部回転ヘラ削り。	口縁部ナデ調整。	内面ナデ調整	1/3欠	11
33	H11－4	坏 須恵器	14.4	8.8	4.0	不良・還元軟	灰色	底部回転ヘラ削り。	口縁部ナデ調整。	内面ナデ調整	2/3欠	11
34	H11－5	坏 土師器	13.6		3.4	不良・酸化	明褐色	口縁部湾曲気味に立ち上がる。	底部ヘラ削り。	内面ナデ調整	2/3欠	11
35	H11－6	蓋 須恵器	15.0		2.6	良・環元硬	黒褐色	口縁部に内傾する。短い返り、偏平な摘み。	体部回転ヘラ削り。	内面ナデ調整 中央部摩滅。	1/3欠	11
36	H11－7	壺 須恵器	15.0	32.0		良・還元硬	黒褐色	口縁部直立気味に立ち上がり短頸。	肩部自然釉、口縁部ナデ調整。	内面ナデ調整	肩部1/4残	11
37	H13－1	鉢 土師器	16.0		5.8	不良・酸化	にぶい橙	平底気味の底部から口縁部は内湾し立ち上がる。	底・体部ヘラ削り。	ナデ調整後ヘラ磨き。	1/2欠	11
38	H14－1	鉢 須恵器	15.2	9.6	6.4	良・還元	灰色	平底から口縁部は直線的に立ち上がる。	底部ヘラ削り、口縁部ナデ調整	内面ナデ調整	ほぼ完形	11
39	H14－2	坏 土師器	10.8		2.8	良・酸化軟	にぶい橙	底部平底気味口縁部内傾。	体部ヘラ削り、口縁部ナデ調整	内面ナデ調整	完形	11
40	H14－3	柑 土師器	8.2	8.8	4.9	良・酸化軟	にぶい橙	丸底から丸味を持って口縁部に至る	体部ヘラ削り、口縁部ナデ調整	内面ナデ調整	完形	12
41	H14－4	坏 土師器	10.7		3.5	不良・酸化軟	橙	底部丸底口縁部内傾。	体部指頭圧痕有り、口縁部ナデ調整	指頭圧痕、内面ナデ調整	1/3欠	12
42	H14－5	坏 土師器	11.2		3.1	不良・酸化軟	にぶい橙	底部丸底気味、口縁部内傾気味。	体部ヘラ削り、口縁部ナデ調整	内面ナデ調整	ほぼ完形	12
43	H14－6	坏 土師器	11.0		3.1	良・酸化軟	にぶい橙	底部平底気味、口縁部内傾。	体部ヘラ削り、口縁部ナデ調整	内面ナデ調整	1/3欠	12
44	H14－7	甕 土師器	20.2			不良・酸化	淡橙	口縁部「ハ」の字状に外反。	口縁部ナデ調整。	内面ナデ調整	口縁部1/2残	12
45	H14－8	坏 土師器	13.4		4.6	不良・酸化軟	にぶい橙	底部丸底で口縁部は直線的に立ち上がる。	体部ヘラ削り、口縁部ナデ調整	内面ナデ調整	1/2欠	12
46	H15－1	坏 土師器	12.4		4.6	不良・酸化軟	橙	高い口縁部、体部から直立的に立ち上がる。	体部ヘラ削り、口縁部ナデ調整	内面ナデ調整	1/3欠	12
47	H15－2	坏 土師器	12.4		4.9	不良・酸化軟	橙	高い口縁部、体部から直立的に立ち上がる。	体部ヘラ削り、口縁部ナデ調整	内面ナデ調整	1/2欠	12
48	H15－3	坏 土師器	11.8		6.6	不良・酸化軟	橙	底部湾曲を示す、高い口縁部。	体部ヘラ削り、口縁部ナデ調整	内面ナデ調整	2/3欠	13
49	H15－4	坏 土師器	13.8		3.3	不良・酸化軟	橙	底部丸底、口縁部外反。	体部ヘラ削り、口縁部ナデ調整	摩滅激しく不明	2/3欠	13
50	H16－1	甑 土師器	16.4			不良・酸化軟	淡橙	口縁部折り返し口縁。	体部～口縁部縦位のハケ目調整。	体部～口縁部横位のハケ目調整。	2/3欠	13
51	H16－2	高坏 須恵器				良・還元	淡灰色	遺存は脚部のみ裾は広く開き出す。	回転ナデ調整。	回転ナデ調整。	脚部残	13
52	H16－3	蓋 須恵器	17.2			良・還元硬	暗灰色	丸味をもった体部、口縁部開き気味	回転ナデ調整。	回転ナデ調整。	一部残	13
53	H17－1	坏 土師器	13.6		4.0	不良・酸化	橙	底部丸底	体部ヘラ削り後ナデ口縁部ナデ調整	内面ナデ調整。	1/2欠	13
54	H17－2	蓋 須恵器	10.5		3.0	良・還元硬	暗灰色	口縁部内傾する。短い返り。	ヘラ削り後ナデ調整。	内面ナデ調整。	完形 宝珠欠	13
55	H17－3	坏 土師器	11.1		3.3	良・酸化軟	橙	底部丸底、立ち気味の口縁部。	体部ヘラ削り、口縁部ナデ調整。	内面ナデ調整。	1/3欠	13
56	H18－1	坏 土師器	11.0		3.1	良・酸化軟	橙	底部丸底、立ち気味の口縁部。	体部ヘラ削り、口縁部ナデ調整。	内面ナデ調整。	ほぼ完形	14
57	H18－2	坏 土師器	11.4		3.4	良・酸化軟	にぶい橙色	底部丸底、立ち気味の口縁部。	体部ヘラ削り、口縁部ナデ調整。	内面ナデ調整。	1/4欠	14
58	H18－3	坏 土師器	12.6		3.5	良・酸化軟	にぶい橙色	底部丸底、立ち気味の口縁部。	体部ヘラ削り、口縁部ナデ調整。	内面ナデ調整。	1/2欠	14
59	H19－1	坏 須恵器	12.4	5.9	3.9	良・還元軟	淡黄色	口縁部直線的に立ち上がる。	体部ヘラ調整、底部右回転糸切り未調整。	内面ナデ調整。	完形	14
60	H19－2	坏 須恵器	15.0	8.5	5.4	良・還元軟	灰色	底部回転糸切り後、貼付け高台。	体部ナデ調整。	内面ナデ調整。	坏部2/3欠	14

番号	出土位置	種類	法量(cm) 口径	底径	器高	胎土・焼成	色調	器形の特徴	(外面)整形	(内面)整形	遺存備考	図版番号
61	H19－3	埦 須恵器	14.4	8.0	6.3	良・還元硬	暗灰色	底部回転糸切り後、貼付け高台。	体部ナデ調整。	内面ナデ調整。	坏部3/4欠	14
62	H19－4	埦 須恵器	12.4	5.5	4.2	良・還元軟	淡黄色	口縁部直線的にたちあがる。	体部ナデ調整。 底部右回転糸切り未調整。	内面ナデ調整。	1/4欠	14
63	H19－5	坏 須恵器	10.3		3.4	不良・酸化軟	にぶい橙色	底部丸底、口縁部内湾。	体部ヘラ削り、口縁部ナデ調整。	内面ナデ調整。	ほぼ完形	14
64	H20－1	坏 土師器	11.3		3.4	不良・酸化軟	にぶい橙色	底部丸底、口縁部外反。	体部ヘラ削り、口縁部ナデ調整。	内面ナデ調整。	ほぼ完形	15
65	H21－1	坏 須恵器	14.6	7.0	5.4	良・還元軟	淡黄色	台形の低い高台から体部直線的に立ち上がる。	底部右回転糸切り後貼付け高台。	内面ナデ調整。	ほぼ完形	15
66	H21－2	埦 須恵器	13.9	6.5	5.2	不良・還元軟	淡灰色	台形の低い高台から体部直線的に立ち上がる。	底部右回転糸切り後貼付け高台。	内面ナデ調整。	ほぼ完形	15
67	H21－3	坏 須恵器	13.2		3.5	良・還元	灰色	広い底部から湾曲気味に立ち上がる	底部右回転糸切り未調整。	内面ナデ調整。	1/2欠	15
68	H21－4	高坏 須恵器		12.8		良・還元	灰色	大きくハの字状に開き底部端、面取り。	回転ナデ調整。	回転ナデ調整。	脚部残	15
69	H21－5	坏 須恵器	14.2	7.0	4.1	良・還元	灰色	広い底部からハの字状に立ち上がる	底部右回転糸切り未調整。	内面ナデ調整。	1/4欠	15
70	H21－6	坏 土師器	12.8	7.5	4.3	不良・酸化軟	にぶい橙色	底部平底、口縁部丸味を持って立ち上がる。	底部ヘラ削り、口縁部ナデ調整	内面ナデ調整。	1/4欠	15
71	H21－7	鉢 須恵器	17.4		6.4	良・還元軟	灰色	底部丸底で深鉢。	体部ナデ調整。	内面ナデ調整。	3/4欠	15
72	H21－8	鉢 須恵器		7.0		不良・還元軟	灰色	台形の低い高台から湾曲気味に立ち上がる。	底部右回転糸切り、貼付け高台。	内面ナデ調整。	底部のみ残	16
73	H21－9	甕 土師器	20.0			良・酸化	にぶい橙色	口縁部「コ」の字が崩れる。	口縁部ナデ調整。	内面ナデ調整。肩部横位のハケ調整。	口縁部 1/2残	16
74	H21－10	壺 須恵器	胴径 35.5	15.7		良・還元	灰色	底部高台貼付け、胴部中央に最大径	体部ナデ調整	内面ナデ調整。	胴部1/2残	16
75	H21－11	坏 須恵器	13.0	6.0	4.1	不良・還元軟	褐色	底部平底、器形ゆがみ有り。	底部ヘラ削り、体部ヘラ調整。	内面ナデ調整。	ほぼ完形	16
76	D2－1	坏 須恵器	13.7	8.5	3.7	不良・還元軟	灰色	広い底部から湾曲気味に立ち上がる	底部回転ヘラ切り、口縁部ナデ。	内面ナデ調整。	口縁部 1/3欠	16
77	D3－1	高坏 土師器	19.0			不良・酸化	橙色	坏部底は水平に開いて外傾する。	坏部はナデ調整。	内面ナデ調整。	坏部1/2欠	16
78	D5－1	高坏 須恵器		9.2		良・還元軟	淡黄色	ハの字に開く高台、広い底部。	底部右回転糸切り、貼付け高台。	内面ナデ調整とうず巻痕有り。	高台のみ残	16
79	D5－2	坏 須恵器	12.6			良・還元	灰白色	口縁部直線的に立ち上がる。	底部回転ヘラ切り、口縁部ナデ調整	内面ナデ調整。	3/4欠	
80	E7－1	蓋 須恵器	8.0	天井 7.0	6.5	良・還元	灰色	コップを逆にした器形を呈する。 宝珠痕有り。	天井部回転ヘラ削り、口縁部ナデ調整。	内面ナデ調整。	ほぼ完形	16
81	試掘1	坏 須恵器	15.8	5.5	3.3	良・還元	灰色	体部は外反し、口縁部面取り。	底部右回転糸切り調整。	内面ナデ調整。	1/3欠	
82	試掘2	砥石				粘板岩系		4面使用。	使用頻度の多さが窺える。	回転ナデ調整。		

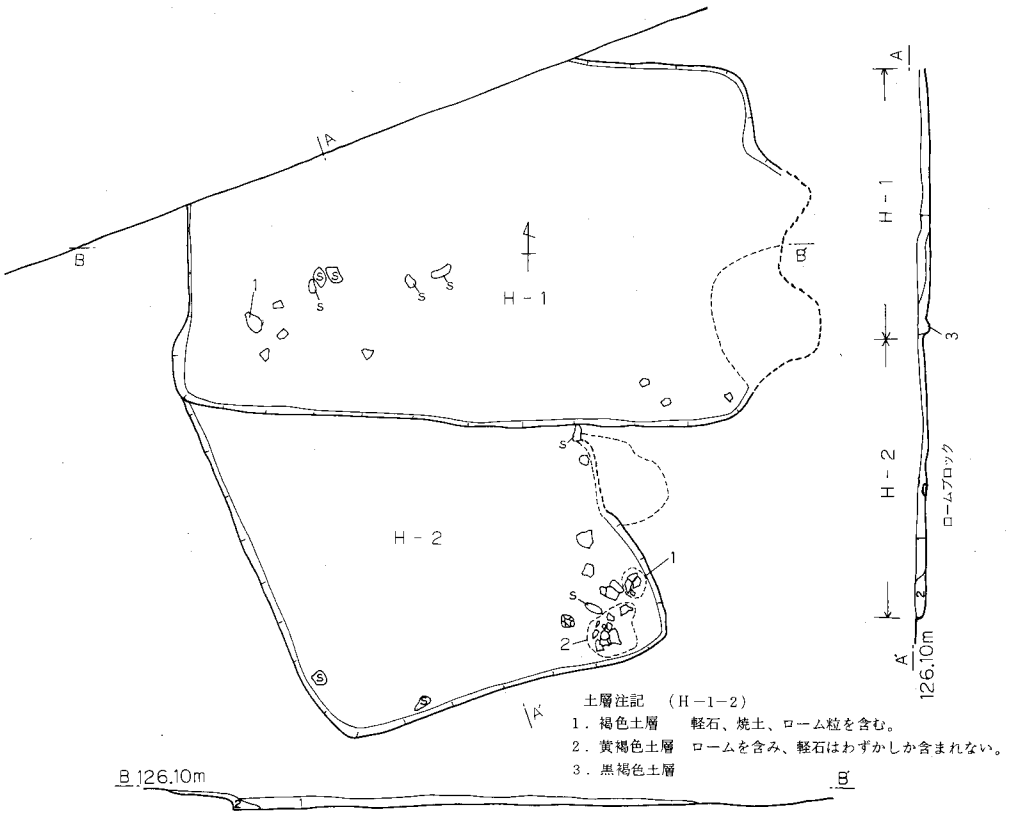
上記の実測図及び観察表に掲載したほかに特筆される物として以下に記載する。

縄文時代の石斧1点と剥片10点が検出され、更に14号住居址から深鉢型の口縁部が出土している。弥生時代は遺構遺物とも検出されなかった。時期は確認出来なかったが、一括として取り上げた遺物の中に須恵質で箆撫でが顕著な丸瓦に似た遺物が出土している。

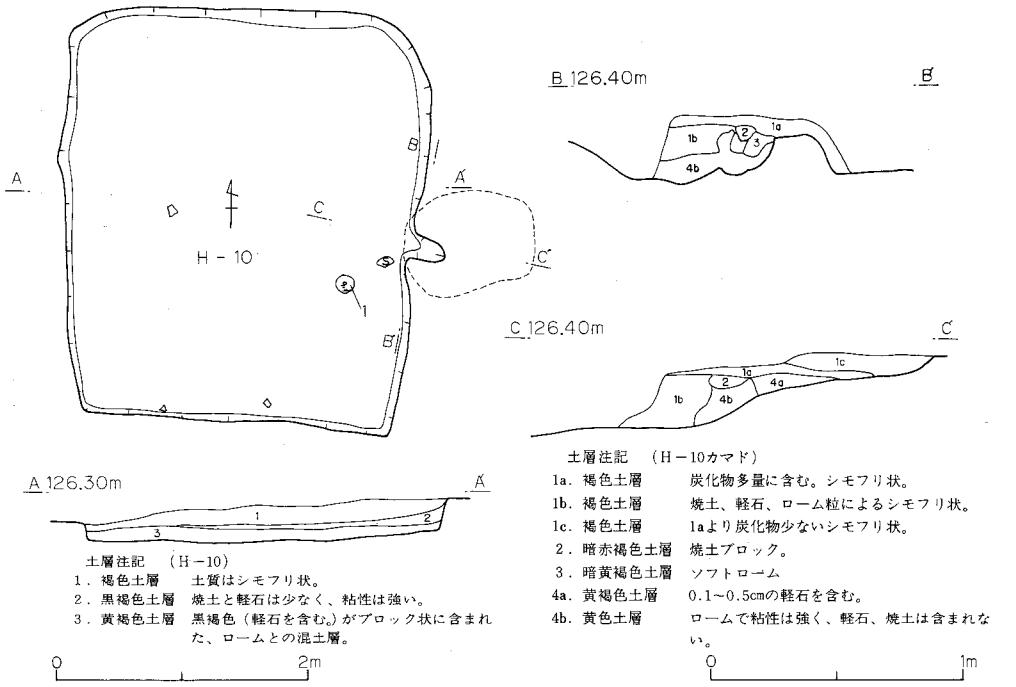
本遺跡では鉄製品の破片が多量に出土している。

平面図

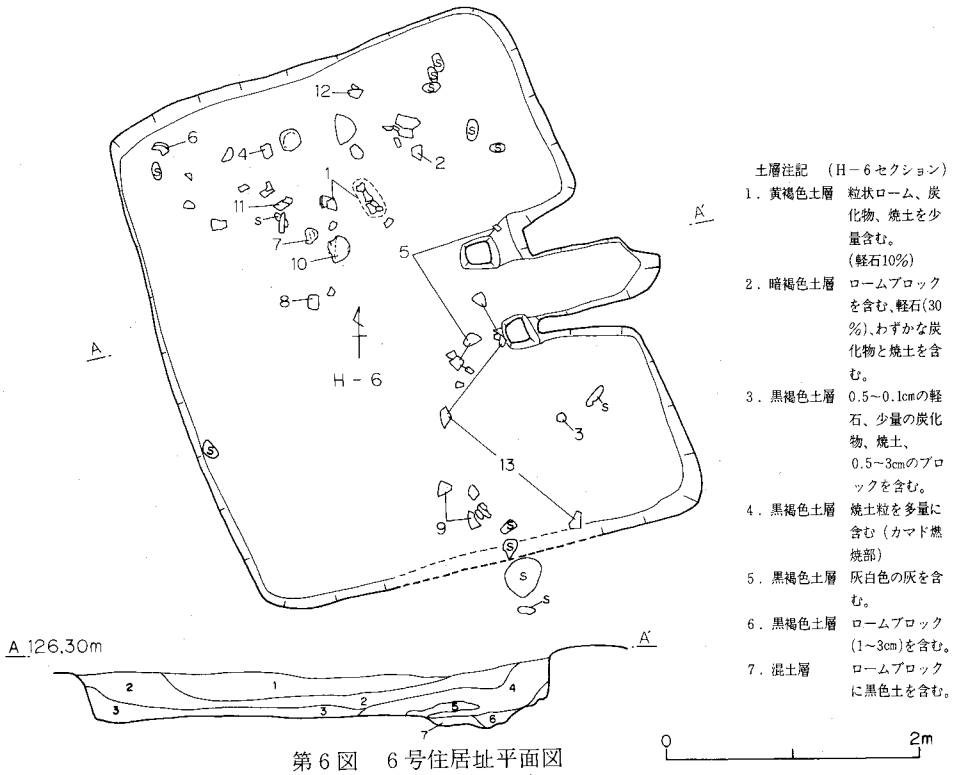
第３図　遺跡全体図



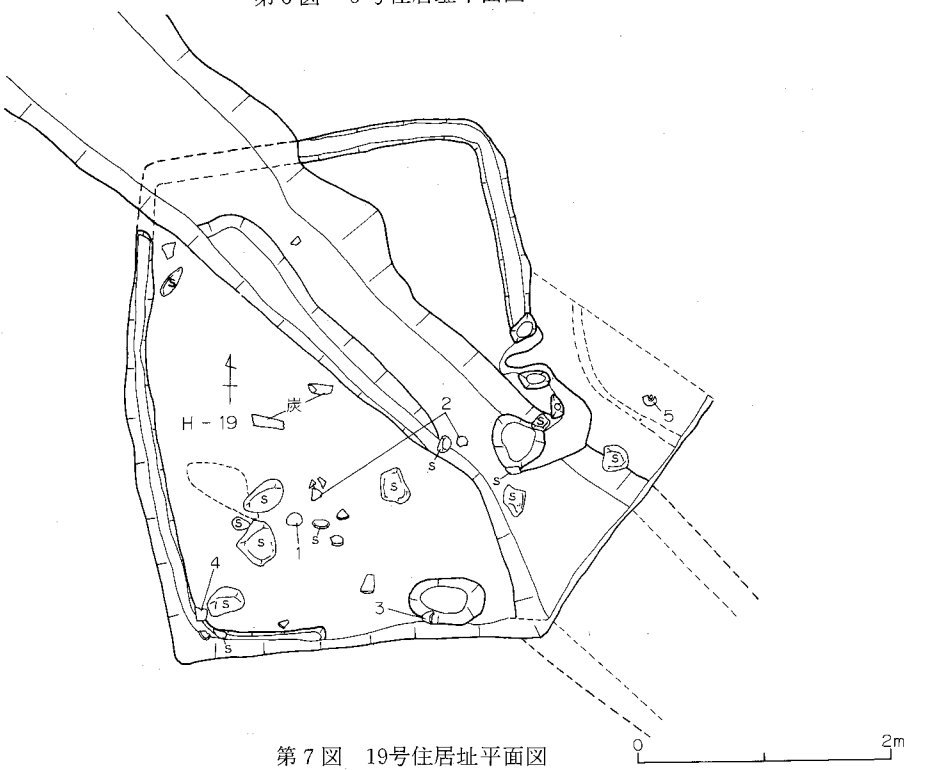
第４図　１号住居址・２号住居址　平面図



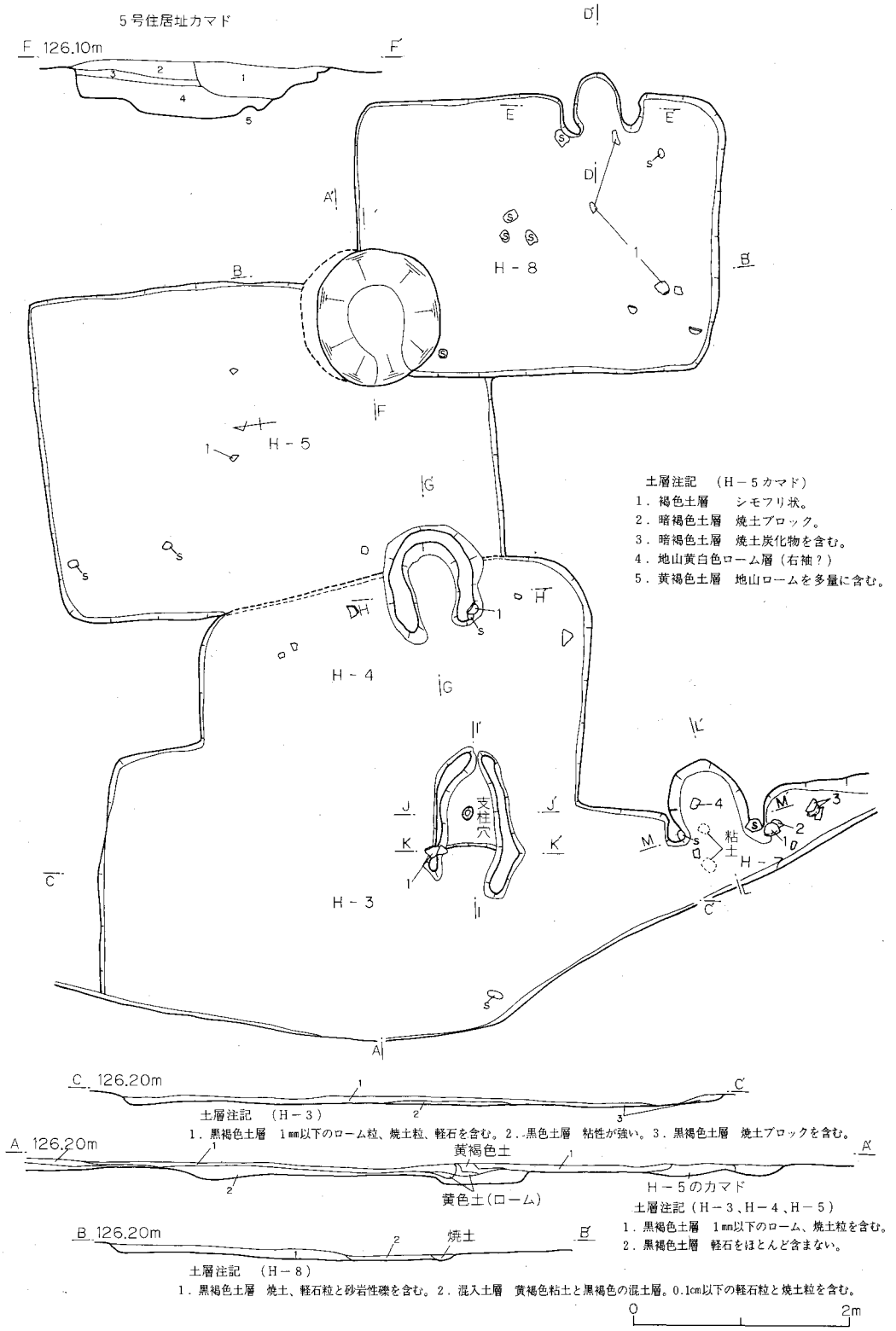
第５図　10号住居址平面図とカマド



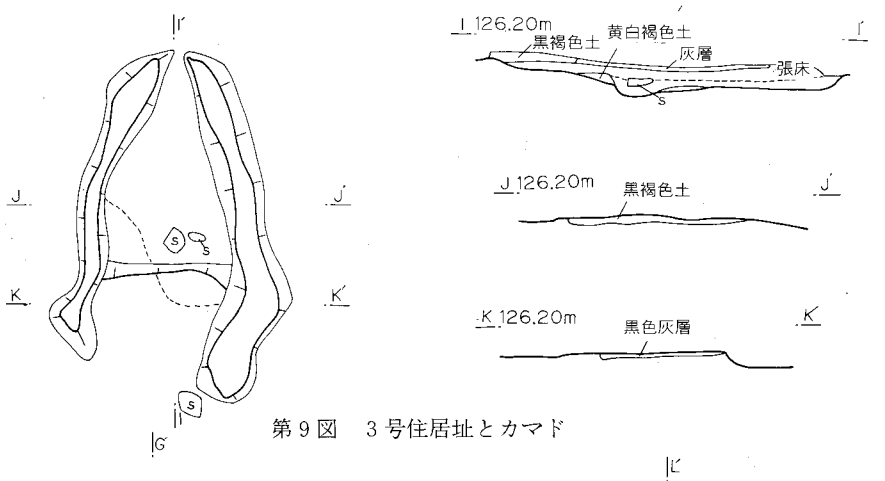
第6図　6号住居址平面図



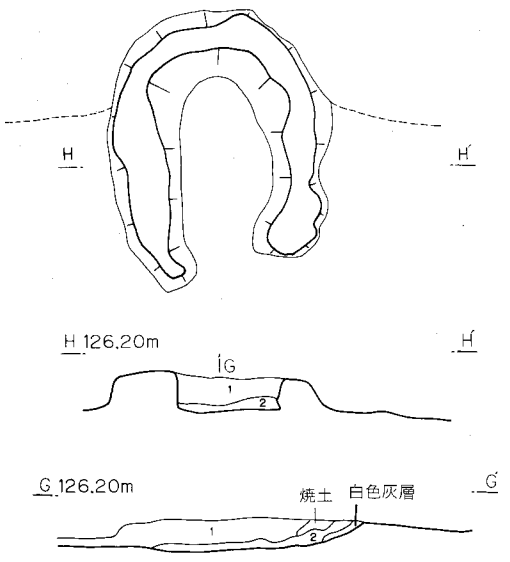
第7図　19号住居址平面図



第8図　3号住居址・4号住居址5号住居址・7号住居址・8号住居址平面

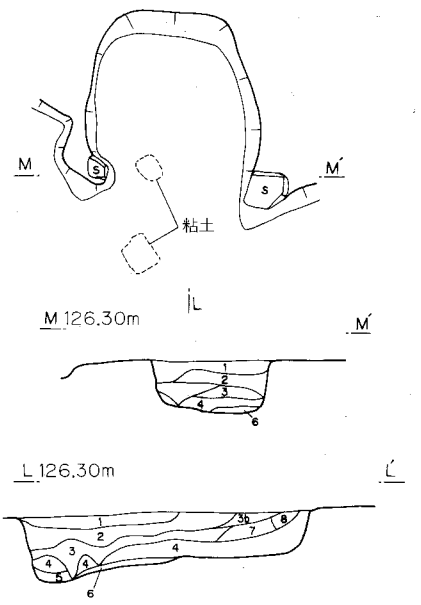


第９図　３号住居址とカマド

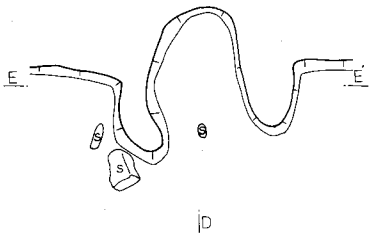


第10図　４号住居址とカマド

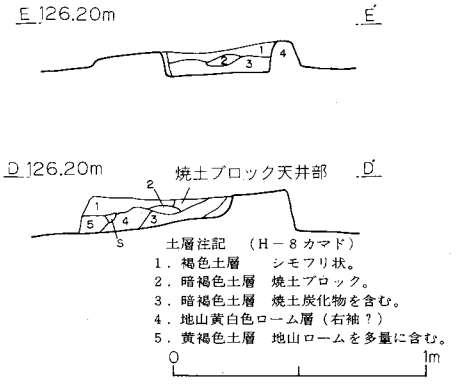
土層注記　（Ｈ－４カマド）
１．黒褐色土層　軽石、焼土粒、炭化物粒がシモフリ状を呈する。
２．黒色の灰層。



第11図　７号住居址とカマド

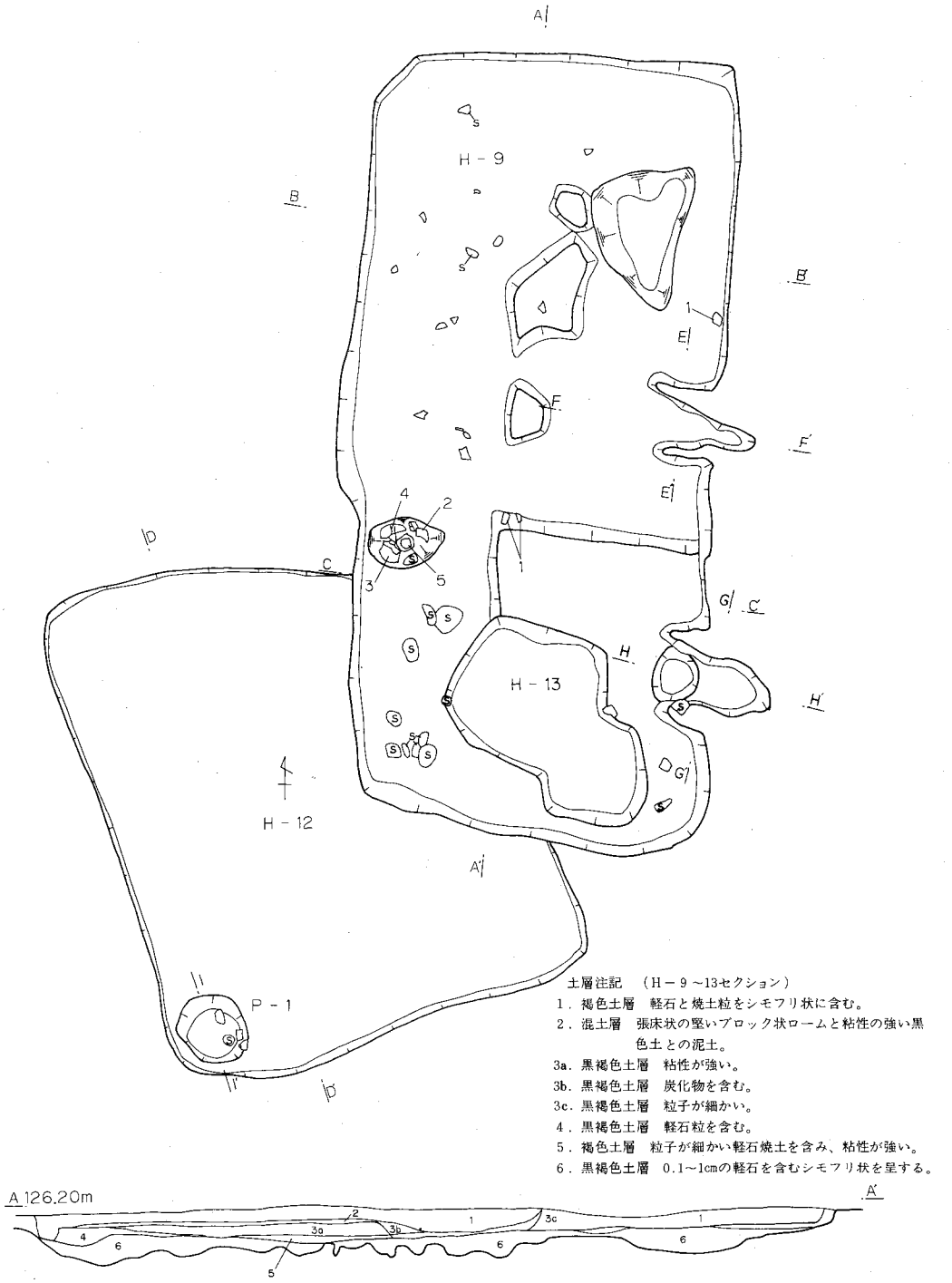


第12図　８号住居址とカマド



土層注記　（Ｈ－８カマド）
１．褐色土層　シモフリ状。
２．暗褐色土層　焼土ブロック。
３．暗褐色土層　焼土炭化物を含む。
４．地山黄白色ローム層（右袖？）
５．黄褐色土層　地山ロームを多量に含む。

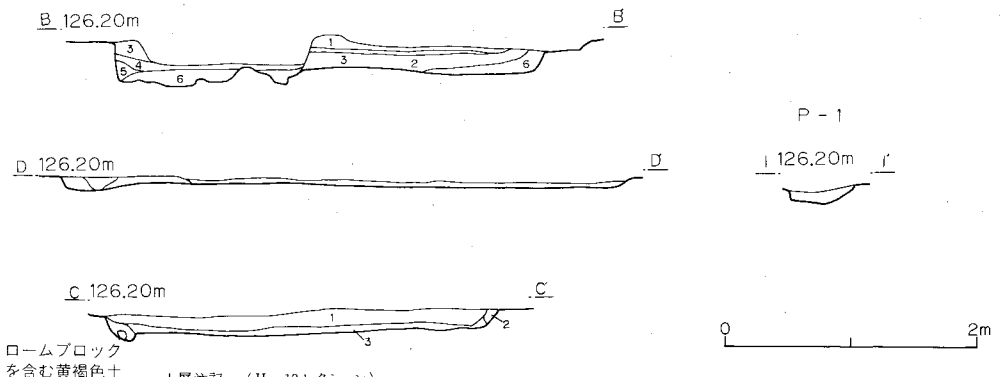
0　1m



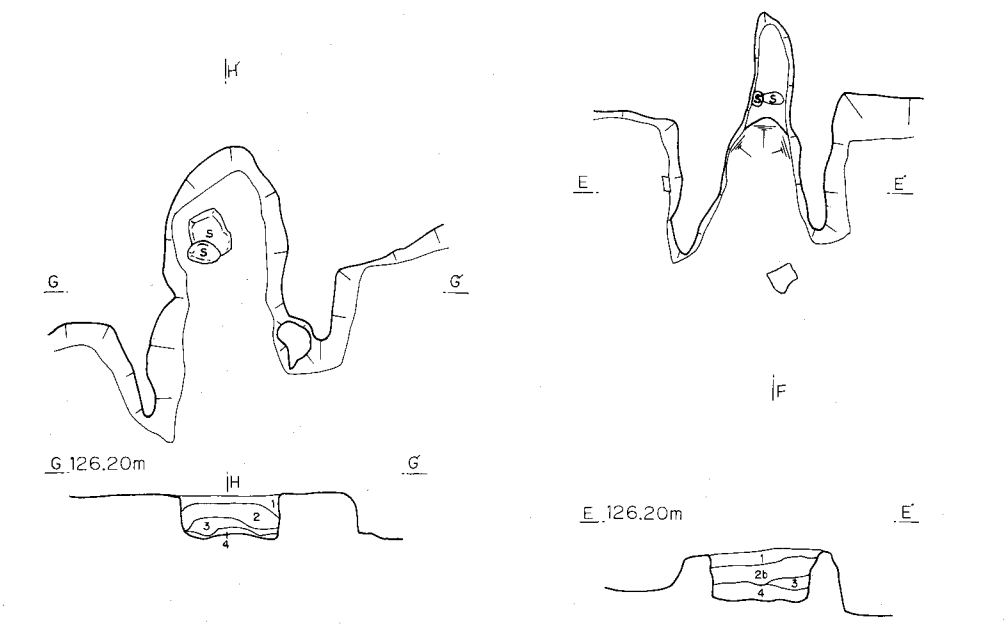
土層注記　（H－9～13セクション）

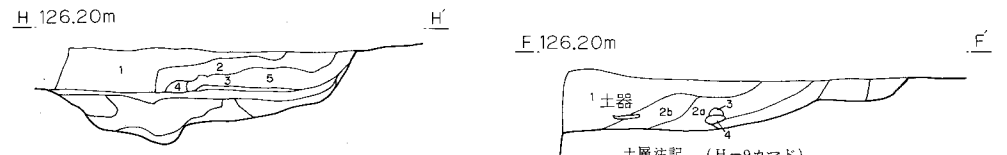
1．褐色土層　軽石と焼土粒をシモフリ状に含む。
2．混土層　張床状の堅いブロック状ロームと粘性の強い黒色土との泥土。
3a．黒褐色土層　粘性が強い。
3b．黒褐色土層　炭化物を含む。
3c．黒褐色土層　粒子が細かい。
4．黒褐色土層　軽石粒を含む。
5．褐色土層　粒子が細かい軽石焼土を含み、粘性が強い。
6．黒褐色土層　0.1～1cmの軽石を含むシモフリ状を呈する。

第13図　9号住居址・12号住居址・13号住居址　平面図



土層注記　（H－13セクション）
1．褐色土層　焼土と軽石（0.5～0.1cm）の粒を含む。
2．黄褐色土層　ロームブロックを含む。
3．黒褐色土層　ロームブロックを含む。

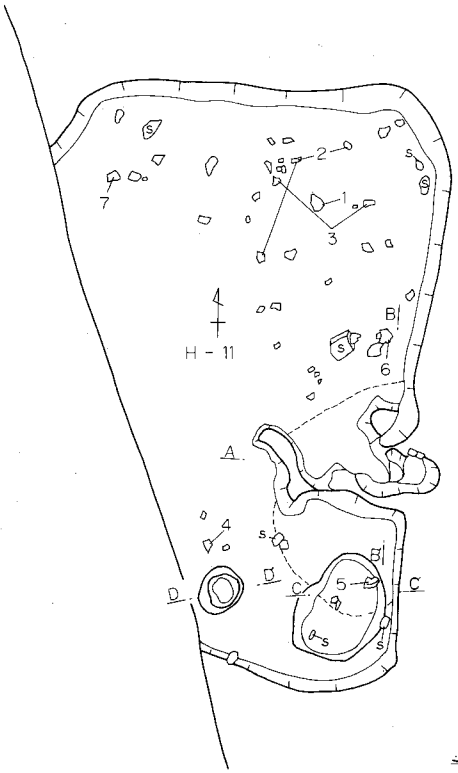




土層注記　（H－13カマド）
1．褐色土層　軽石、焼土、ロームによるシモフリ状を呈す。
2．暗黒褐色土層　焼土を含む。
3．黒色灰層
4．ロームブロック
5．褐色土層　焼土を含む。

土層注記　（H－9カマド）
1．褐色土層　シモフリ状。
2a．褐色土層　ブロック状の焼土を含む。
2b．褐色土層　2a層より焼土の粒が細かい。
3．黄褐色土層　地山のローム粒を含む。
4．褐色土層　細かい焼土と灰（白黒の小ブロック）を含む。
軽石を少量含んでいる。

第14図　13号住居址とカマド　0　1m　第15図　9号住居址とカマド



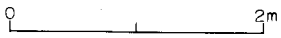
土層注記　（H－11貯蔵穴）

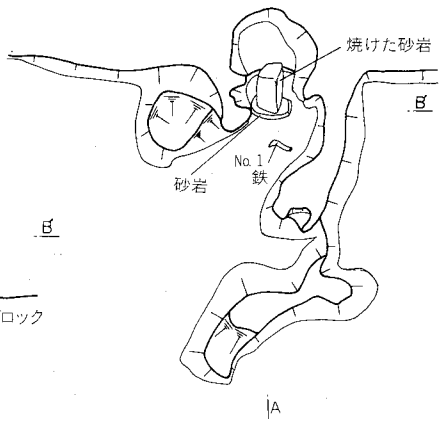
1．黒色灰層
2．黄色ローム（地山）
3．暗赤褐色土層　わずかに焼土を含む。
4．3に黒色灰を含む。

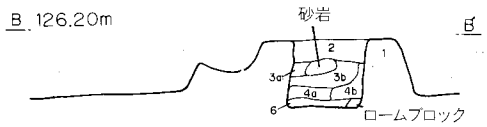
土層注記

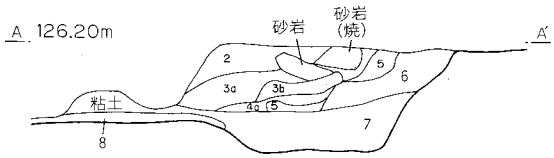
1．地山ロームに焼土を含む。
2．黒褐色土層　粘性あり。
3．やわらかい地山ロームの黄褐色土層。

第16図　11号住居址平面図





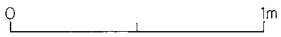




第17図　11号住居址とカマド

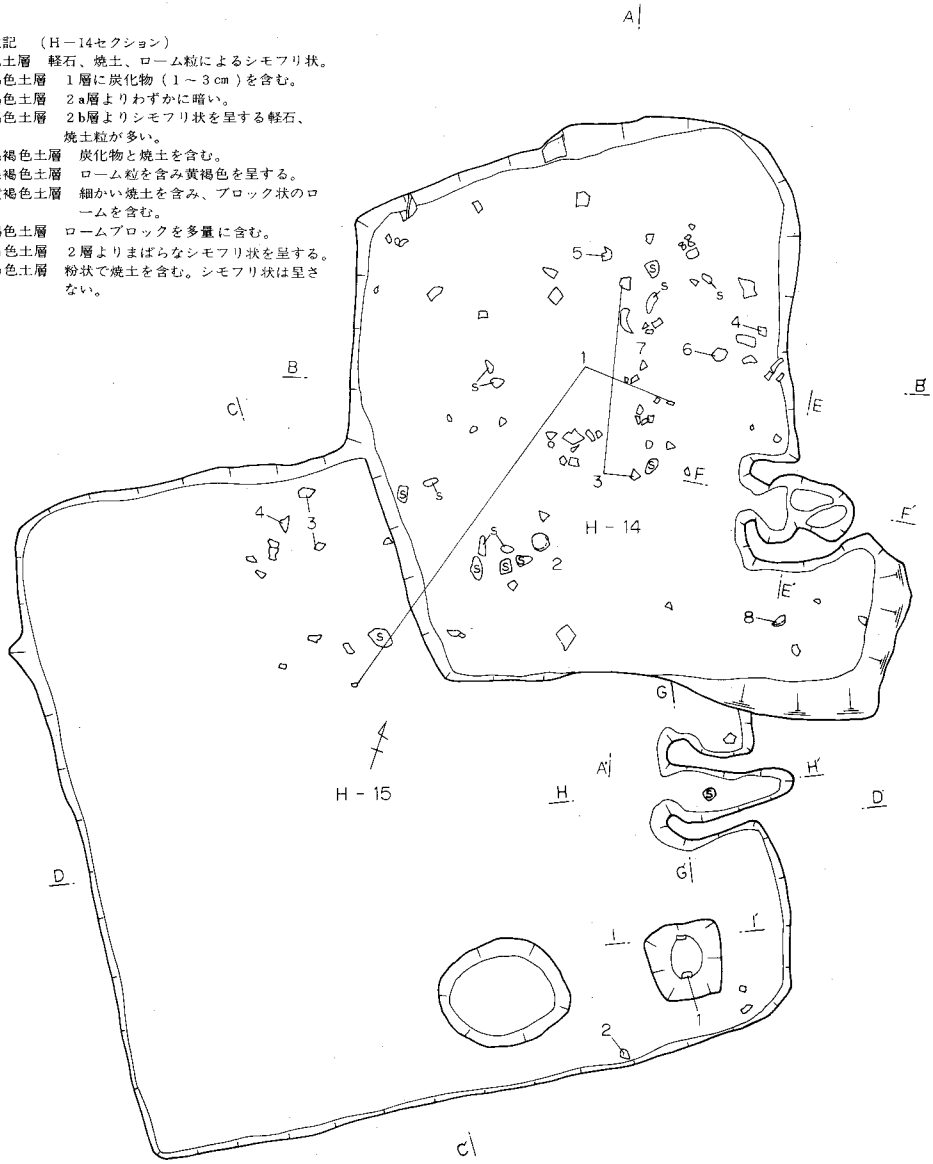
土層注記　（H－11）

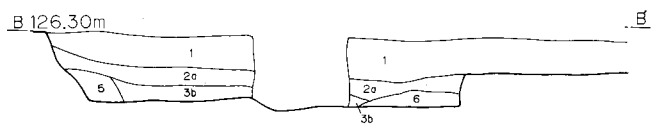
1．粘　土　地山の砂礫質、黄白色粘土。
2．褐色土層　軽石（1～3㎜）焼土粒を含む。
3a．黒褐色土層　炭化物、砂質の礫を含む。
3b．黒褐色土層　3aと同じだが、焼土が多い。
4a．黒褐色土層　粘性が強く、焼土と炭化物を含む。
4b．黒褐色土層　4aと同じだが、ローム粒を含む。
5．焼　土
6．暗赤褐色土層　焼土に黒色灰を含む。
7．混土層　ロームと軽石灰焼土炭化物を含む。
8．黒色土層　粘性が強い

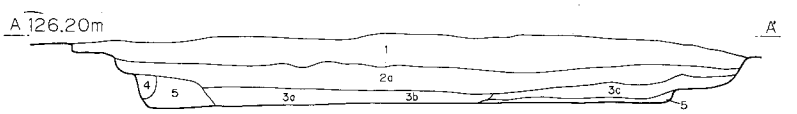


土層注記　（H－14セクション）

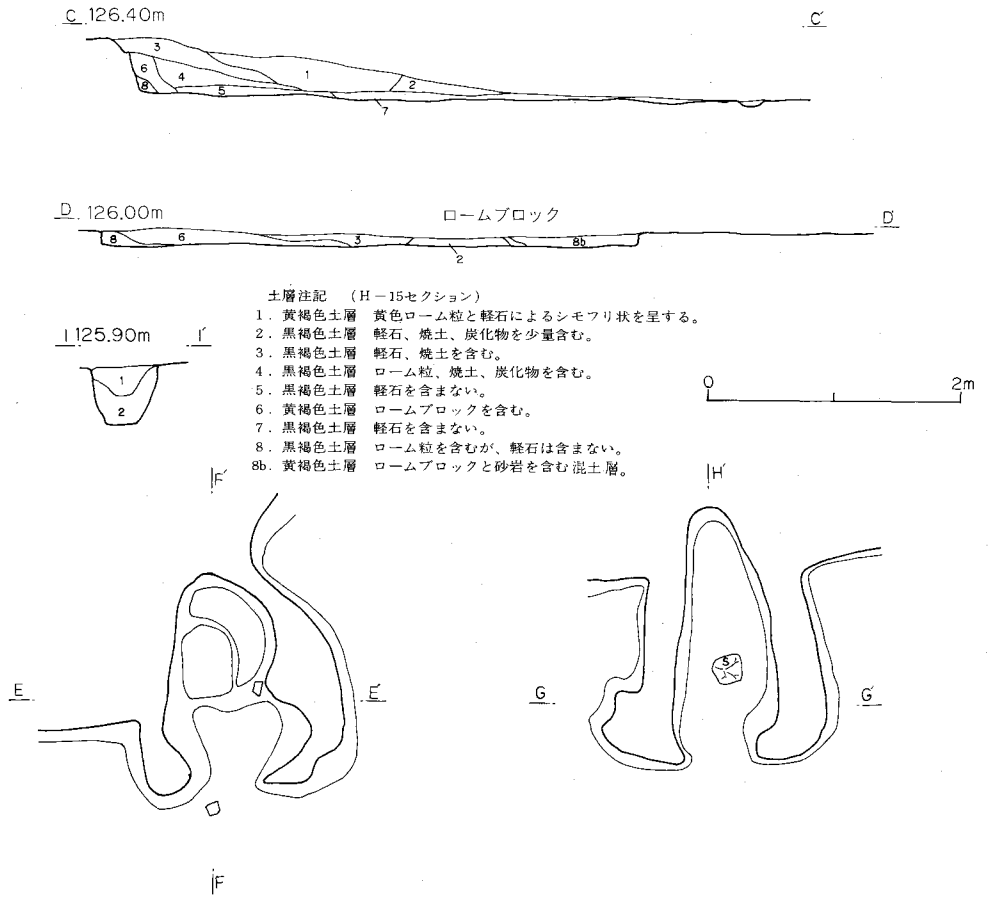
1．褐色土層　軽石、焼土、ローム粒によるシモフリ状。
2a．黒褐色土層　1層に炭化物（1～3cm）を含む。
2b．黒褐色土層　2a層よりわずかに暗い。
2c．黒褐色土層　2b層よりシモフリ状を呈する軽石、焼土粒が多い。
3a．暗黒褐色土層　炭化物と焼土を含む。
3b．暗黒褐色土層　ローム粒を含み黄褐色を呈する。
3c．赤黄褐色土層　細かい焼土を含み、ブロック状のローム を含む。
4．黄褐色土層　ロームブロックを多量に含む。
5．黄褐色土層　2層よりまばらなシモフリ状を呈する。
6．赤褐色土層　粉状で焼土を含む。シモフリ状は呈さない。







第18図　14号住居址・15号住居址　平面図　0　2m



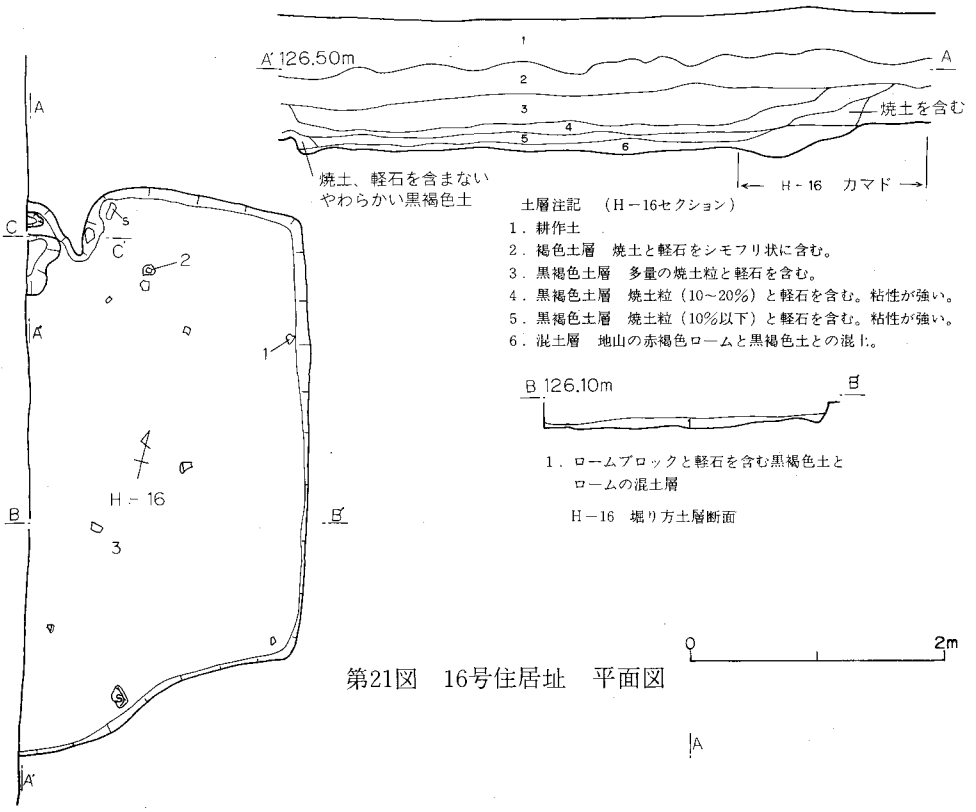
土層注記　（H－15セクション）
1．黄褐色土層　黄色ローム粒と軽石によるシモフリ状を呈する。
2．黒褐色土層　軽石、焼土、炭化物を少量含む。
3．黒褐色土層　軽石、焼土を含む。
4．黒褐色土層　ローム粒、焼土、炭化物を含む。
5．黒褐色土層　軽石を含まない。
6．黄褐色土層　ロームブロックを含む。
7．黒褐色土層　軽石を含まない。
8．黒褐色土層　ローム粒を含むが、軽石は含まない。
8b．黄褐色土層　ロームブロックと砂岩を含む混土層。

土層注記　（H－14－15カマド）
1a．褐色土層　シモフリ状。
1b．黄白色粘質土層
2．粘土・褐色土混土層
3．1a・1b混土層
4．褐色土層　シモフリ状（1～3cm）の焼土ブロック混入。
5a．暗褐色土層　粉状の焼土を含む。
5b．暗赤褐色土層　粉状の焼土を含む。
6．黄色粘土ブロック
7．焼土層
8．褐色土層　焼土ブロックを含む。
9．黄褐色土層　地山のロームより少し黒い。
10．黒色灰層

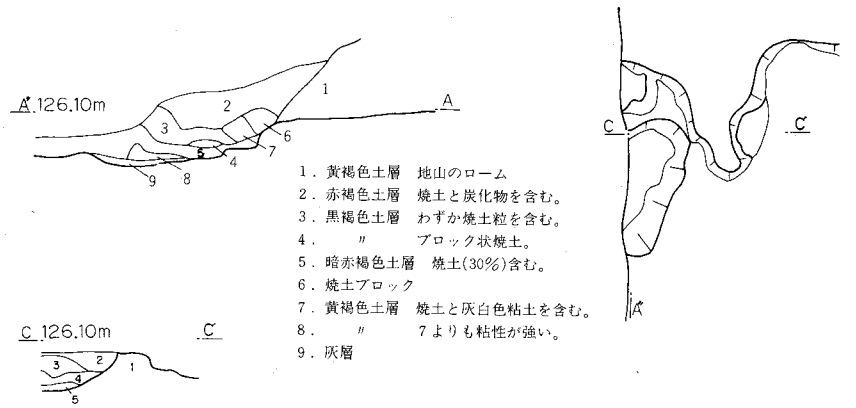
第19図　14号住居址とカマド

0　1m

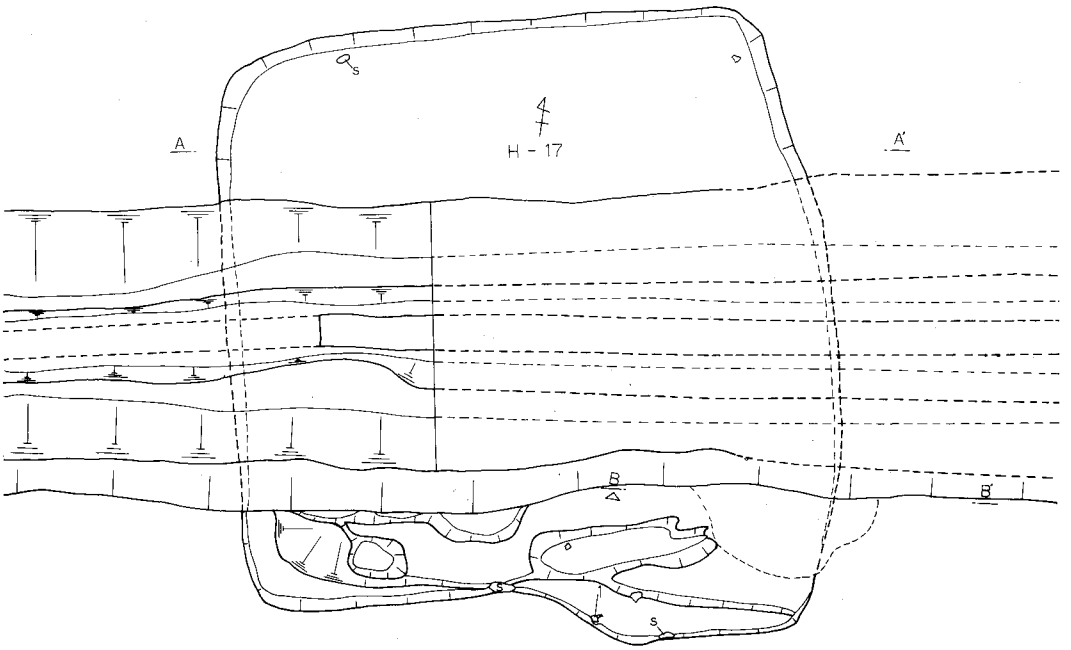
第20図　15号住居址とカマド

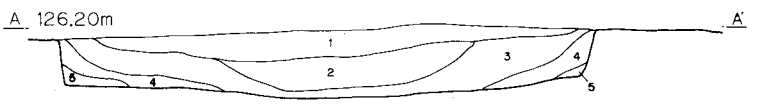


第21図 16号住居址 平面図



第22図 16号住居址とカマド

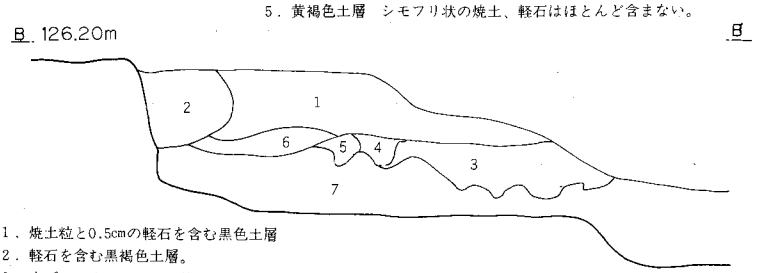




土層注記　（H－17セクション）

1．褐色土層　焼土粒（1～3cm）を多量に含む。
2．黒褐色土層　炭化物、焼土、軽石粒を含む。
3．黒褐色土層　炭化物はほとんど含まれていない。
4．黄褐色土層　焼土、軽石が粒状を呈する。
5．黄褐色土層　シモフリ状の焼土、軽石はほとんど含まない。

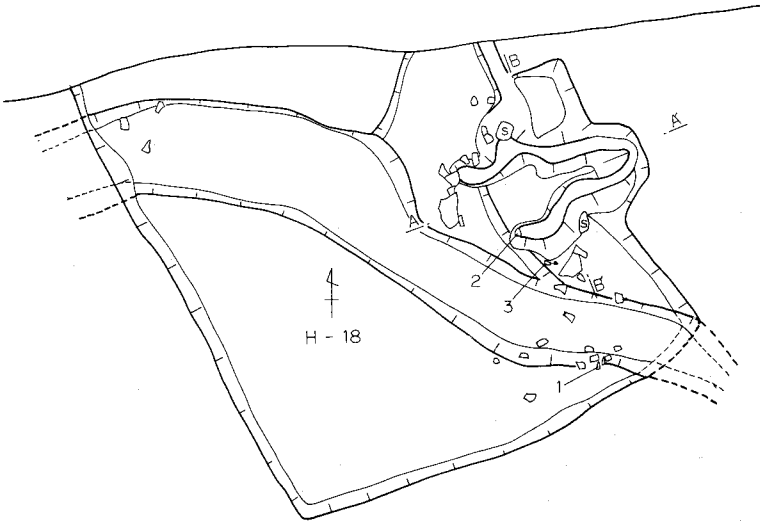
0　2m



1．焼土粒と0.5cmの軽石を含む黒色土層
2．軽石を含む黒褐色土層。
3．小ブロックのロームと焼土を含む黒褐色土層。
4．ロームを含む黄褐色土層。
5．わずかな焼土を含む黄色土層。
6．ロームと焼土を含む黄褐色土層
7．地山の黄色砂礫ローム層。

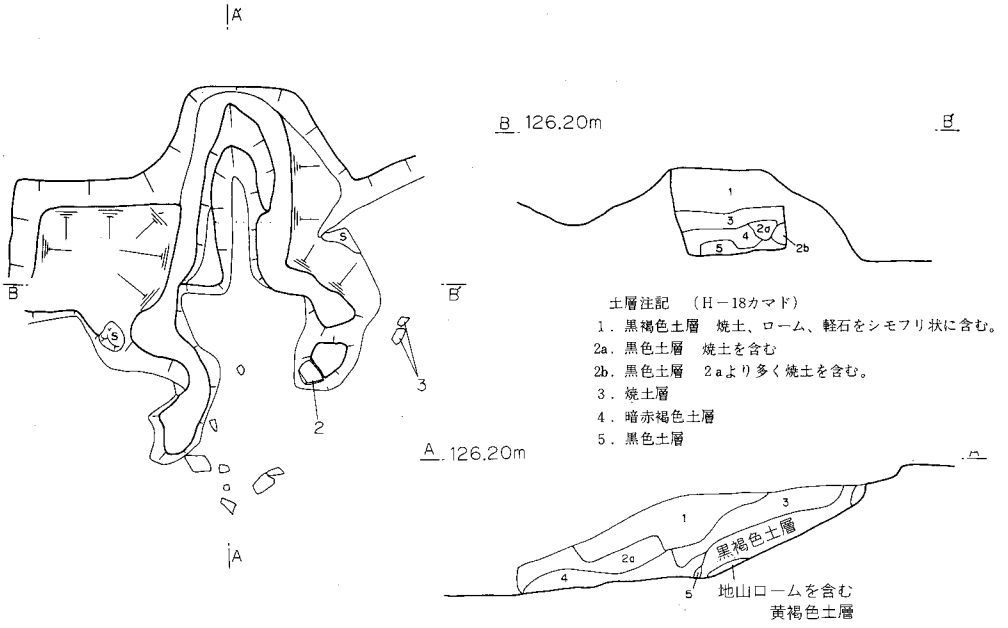
第23図　17号住居址　平面図とカマド

0　1m



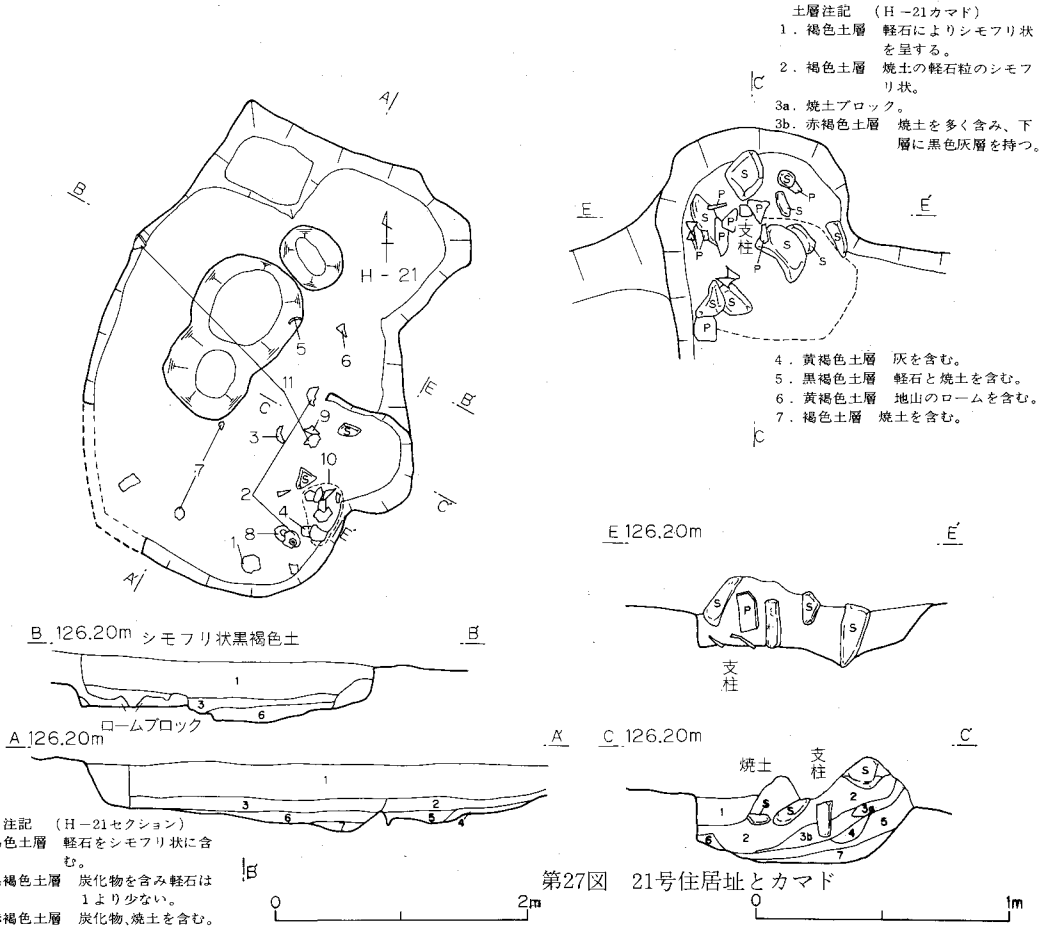
第24図　18号住居址　平面図

0　2m



第25図　18号住居址とカマド

0　1m

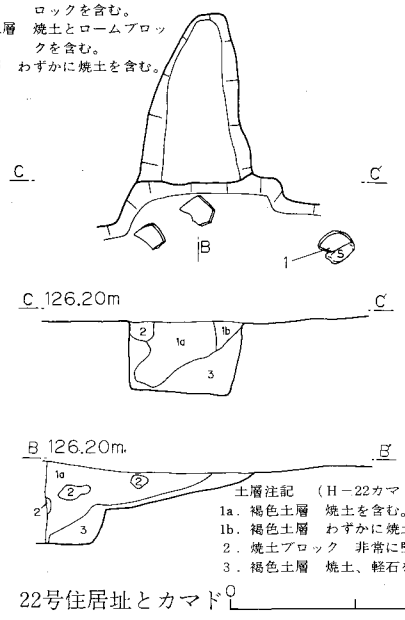


土層注記　（H－21カマド）
1．褐色土層　軽石によりシモフリ状を呈する。
2．褐色土層　焼土の軽石粒のシモフリ状。
3a．焼土ブロック。
3b．赤褐色土層　焼土を多く含み、下層に黒色灰層を持つ。
4．黄褐色土層　灰を含む。
5．黒褐色土層　軽石と焼土を含む。
6．黄褐色土層　地山のロームを含む。
7．褐色土層　焼土を含む。

土層注記　（H－21セクション）
1．褐色土層　軽石をシモフリ状に含む。
2．黒褐色土層　炭化物を含み軽石は1より少ない。
3．赤褐色土層　炭化物、焼土を含む。
4．黄褐色土層　粒状ロームを含む。
5．黒褐色土層　軽石、ロームの小ブロックを含む。
6．赤褐色土層　焼土とロームブロックを含む。
7．褐色土層　わずかに焼土を含む。

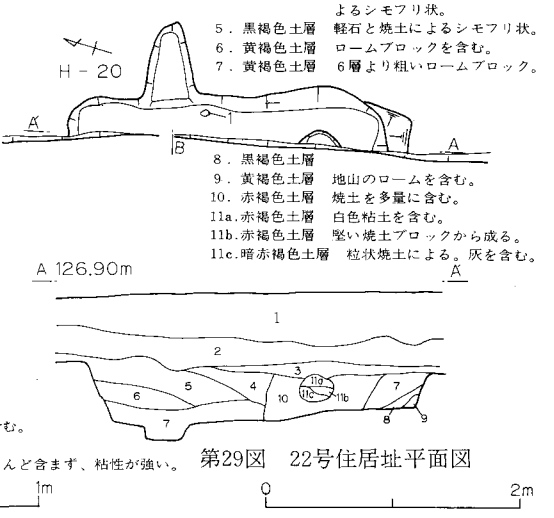
第26図　21号住居址平面図

第27図　21号住居址とカマド



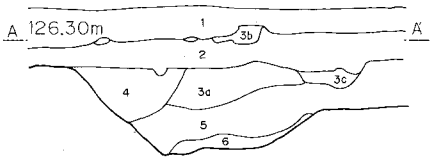
土層注記　（H－22カマド）
1a．褐色土層　焼土を含む。
1b．褐色土層　わずかに焼土を含む。
2．焼土ブロック　非常に堅い。
3．褐色土層　焼土、軽石をほとんど含まず、粘性が強い。

第28図　22号住居址とカマド



土層注記　（H－22セクション）
1．耕作土
2．褐色土層　軽石と細かい焼土によるシモフリ状を呈する。
3．赤黄褐色土層　軽石と5㎜位の焼土によるシモフリ状。
4．黄褐色土層　軽石、焼土、ロームブロックによるシモフリ状。
5．黒褐色土層　軽石と焼土によるシモフリ状。
6．黄褐色土層　ロームブロックを含む。
7．黄褐色土層　6層より粗いロームブロック。
8．黒褐色土層
9．黄褐色土層　地山のロームを含む。
10．赤褐色土層　焼土を多量に含む。
11a．赤褐色土層　白色粘土を含む。
11b．赤褐色土層　堅い焼土ブロックから成る。
11c．暗赤褐色土層　粒状焼土による。灰を含む。

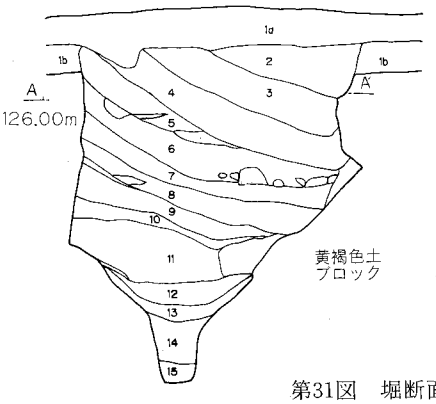
第29図　22号住居址平面図



第30図　溝断面図

土層注記

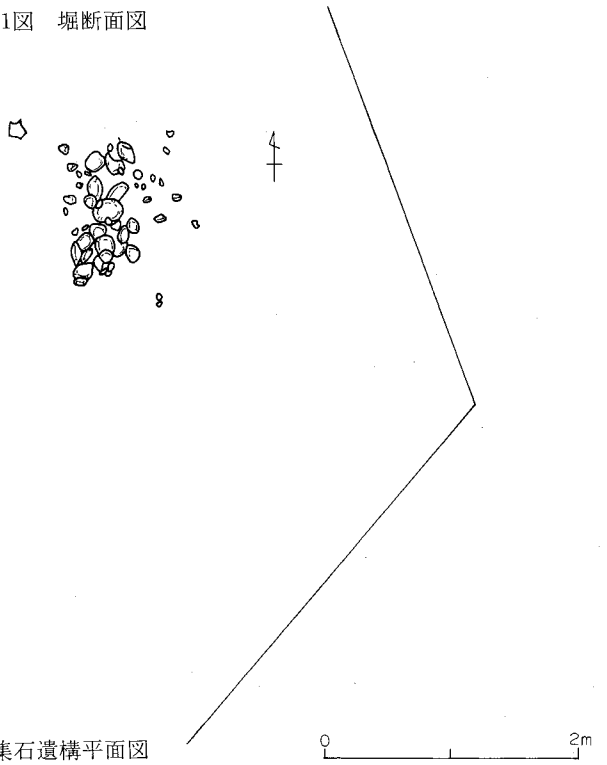
1．褐色土層　耕作土。
2．褐色土層　軽石と焼土粒によるシモフリ状を呈する。
3a．黒褐色土層　1mm前後の軽石と10mmほどのロームブロックを含み粘性は強い。
3b．黒褐色土層　3a層より軽石を多量に含むブロック。
3c．黒褐色土層　軽石の含有量が3a層と3b層との中間くらいである。
4．黒褐色土層　3a層より少し明るい土色を持ち、粘性が強い。
5．黒褐色土層　粘性が強く、軽石、ロームブロックをほとんど含まない。
6．黄褐色土層　地山の赤黄褐色ロームを粉状に含む。



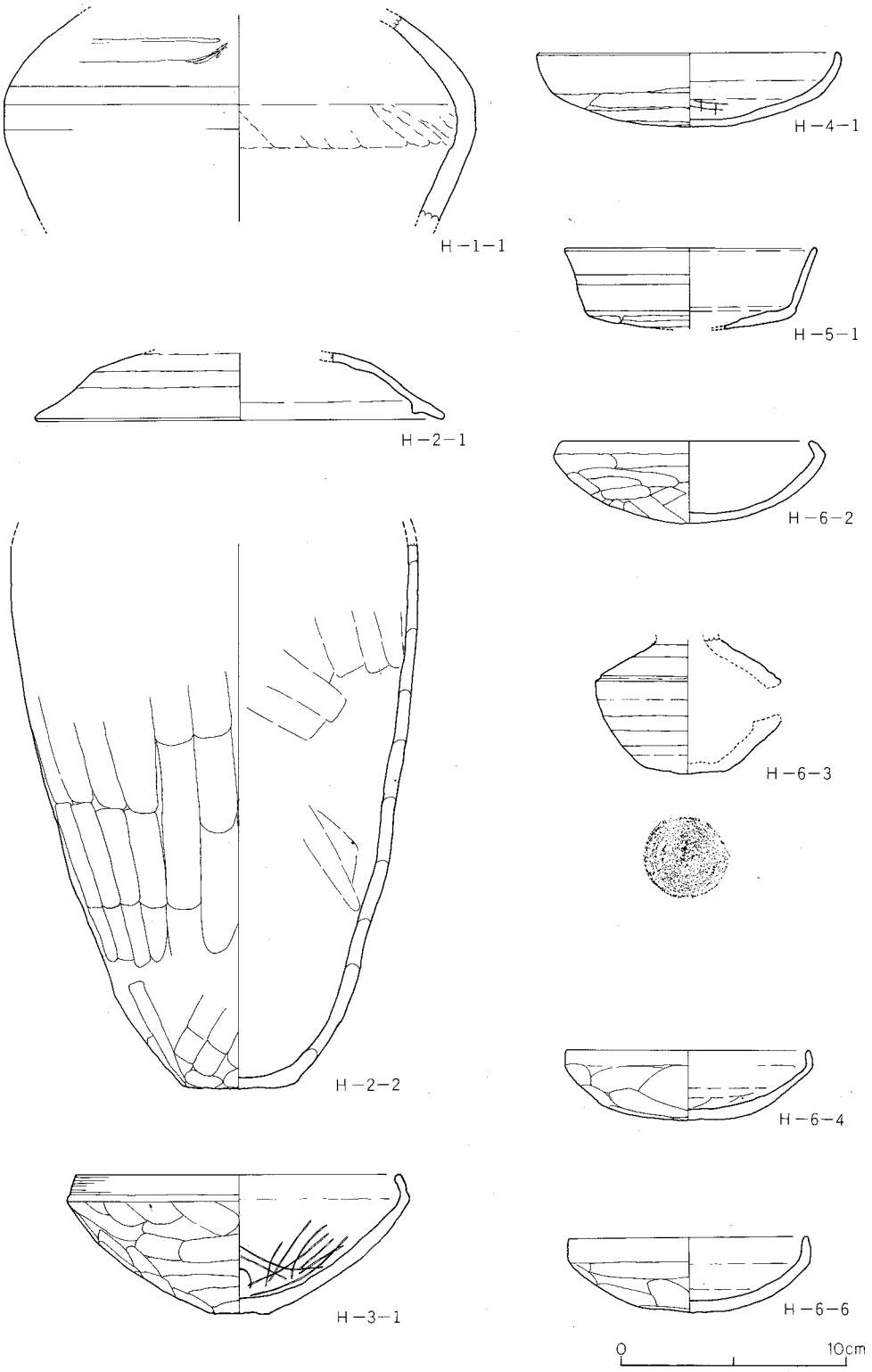
第31図　堀断面図

土層注記

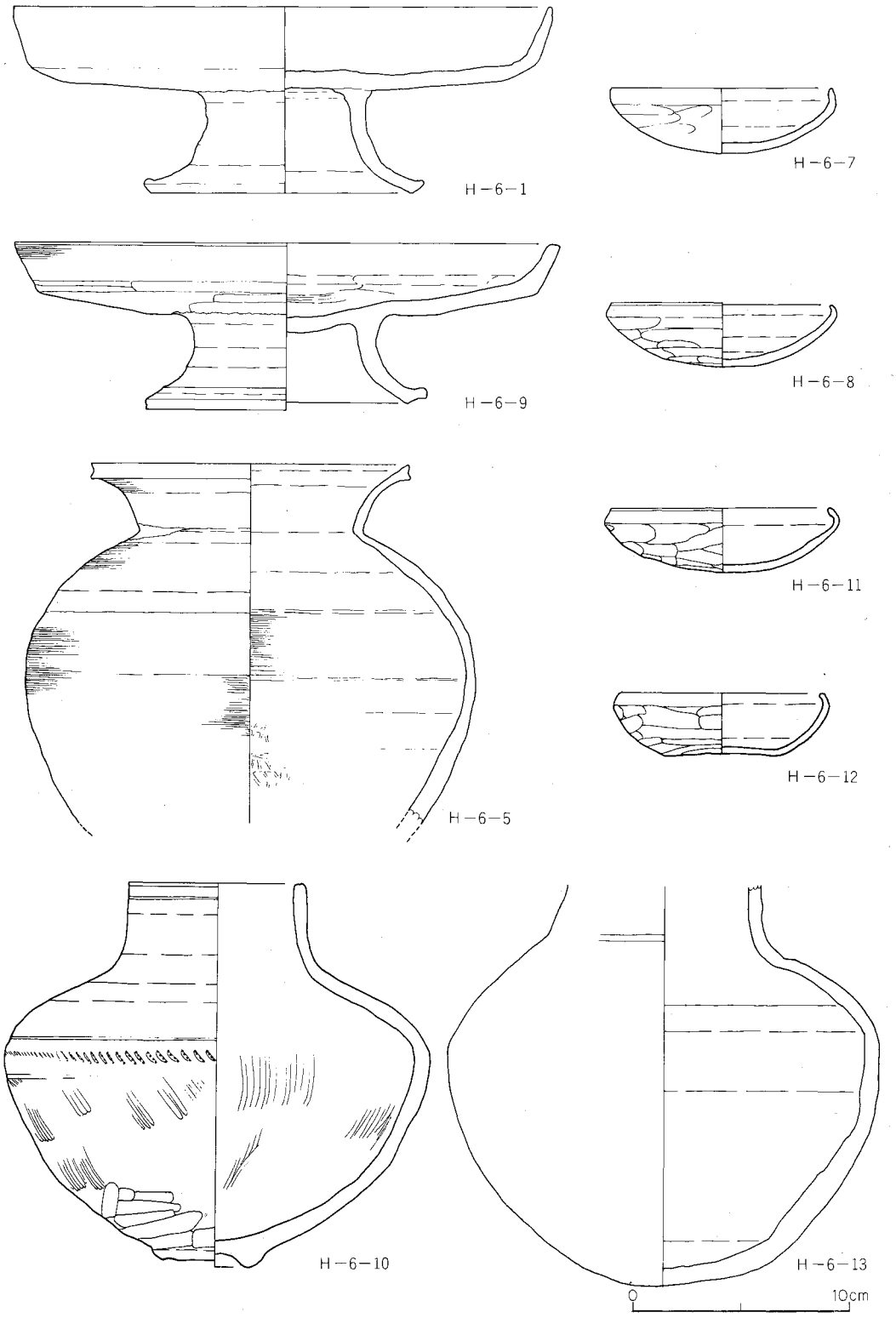
1a．褐色土層　耕作土。
1b．褐色土層　軽石を含む。
2．黄褐色土層　ロームブロックと軽石を含む。
3．黄褐色土層　ロームブロックを多量に含む(60%)
4．黒褐色土層　軽石とロームを含む。
5．黄褐色土層　砂質土と黒褐色土のブロックを含む。
6．混土層　黒褐色土、砂岩質土(灰白色)、ロームブロック状
7．黄褐色土層　ロームと灰白色砂質を含む。
8．黄褐色土層　7層より粒の粗い軽石を含む。
9．黄褐色土層　8層より砂質が多く粒が細かい。
10．灰白色砂層。
11．黄褐色混土層
12．黄褐色混土層　11層より土色は暗い。
13．褐色土層　粘質でほとんど軽石を含まない。
14．砂　層
15．砂　層　砂質の黒色土がブロック状に混じる。

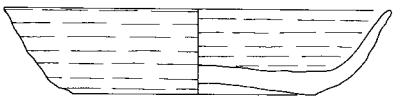


第32図　集石遺構平面図

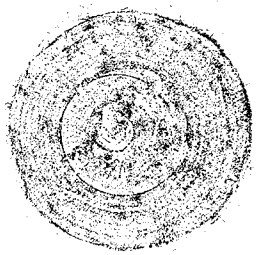

H－1－1
H－4－1
H－5－1
H－2－1
H－6－2
H－6－3
H－2－2
H－6－4
H－3－1
H－6－6
0
10cm

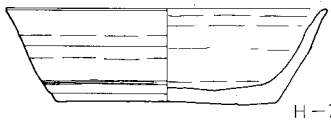
実測図 2



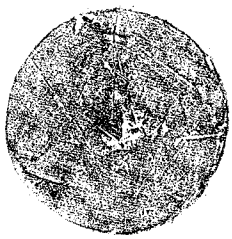


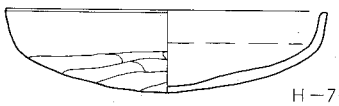
H－7－1



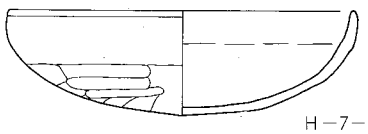


H－7－2

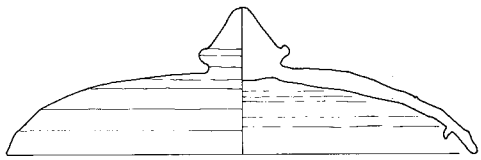




H－7－3

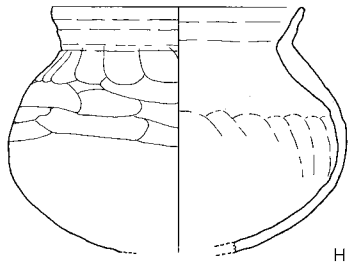


H－7－4

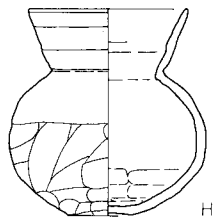


H－8－1

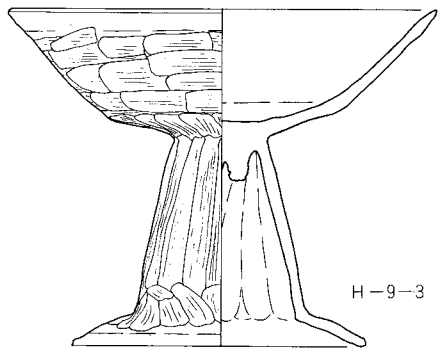
H－9－1



H－9－2



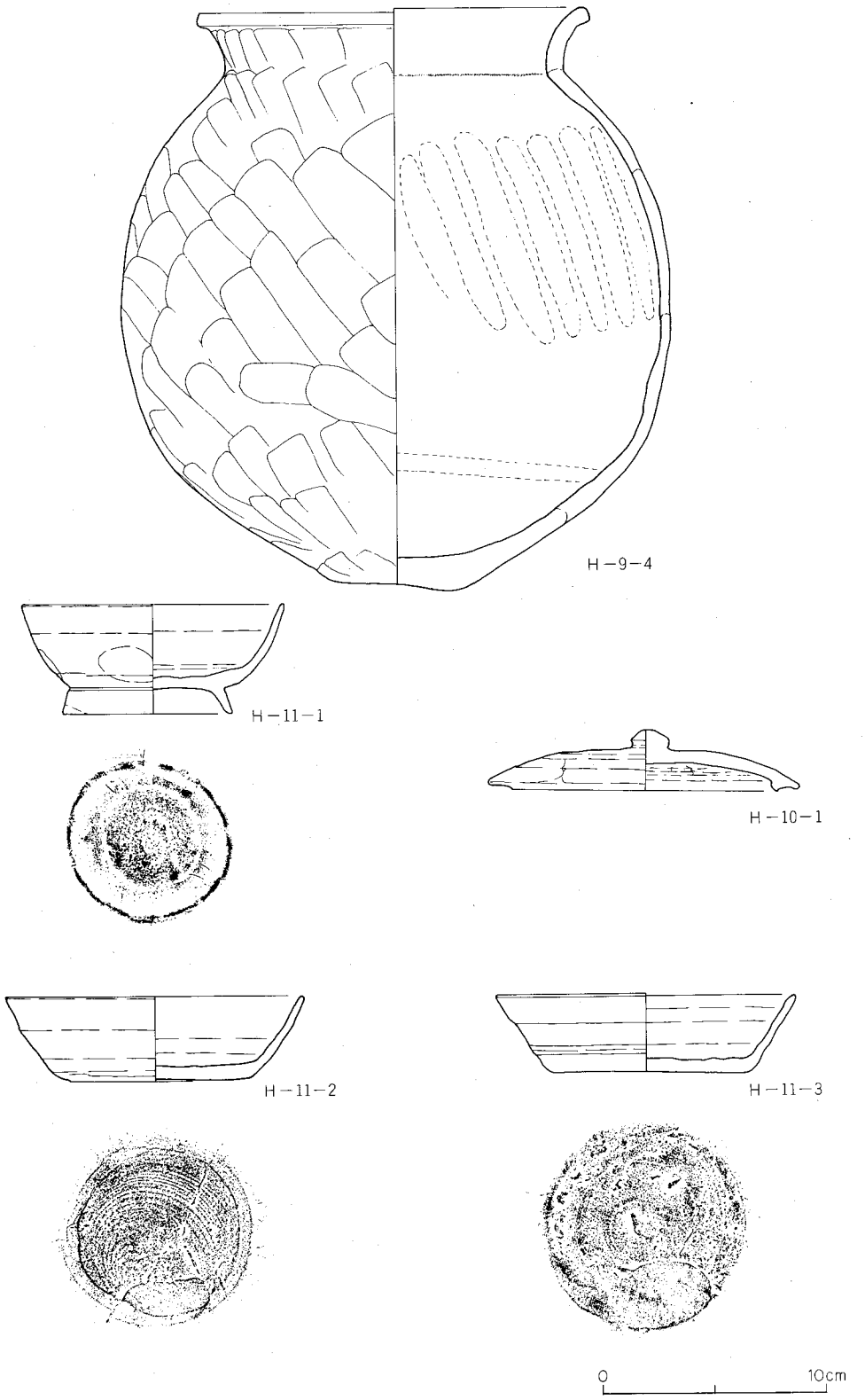
H－9－5

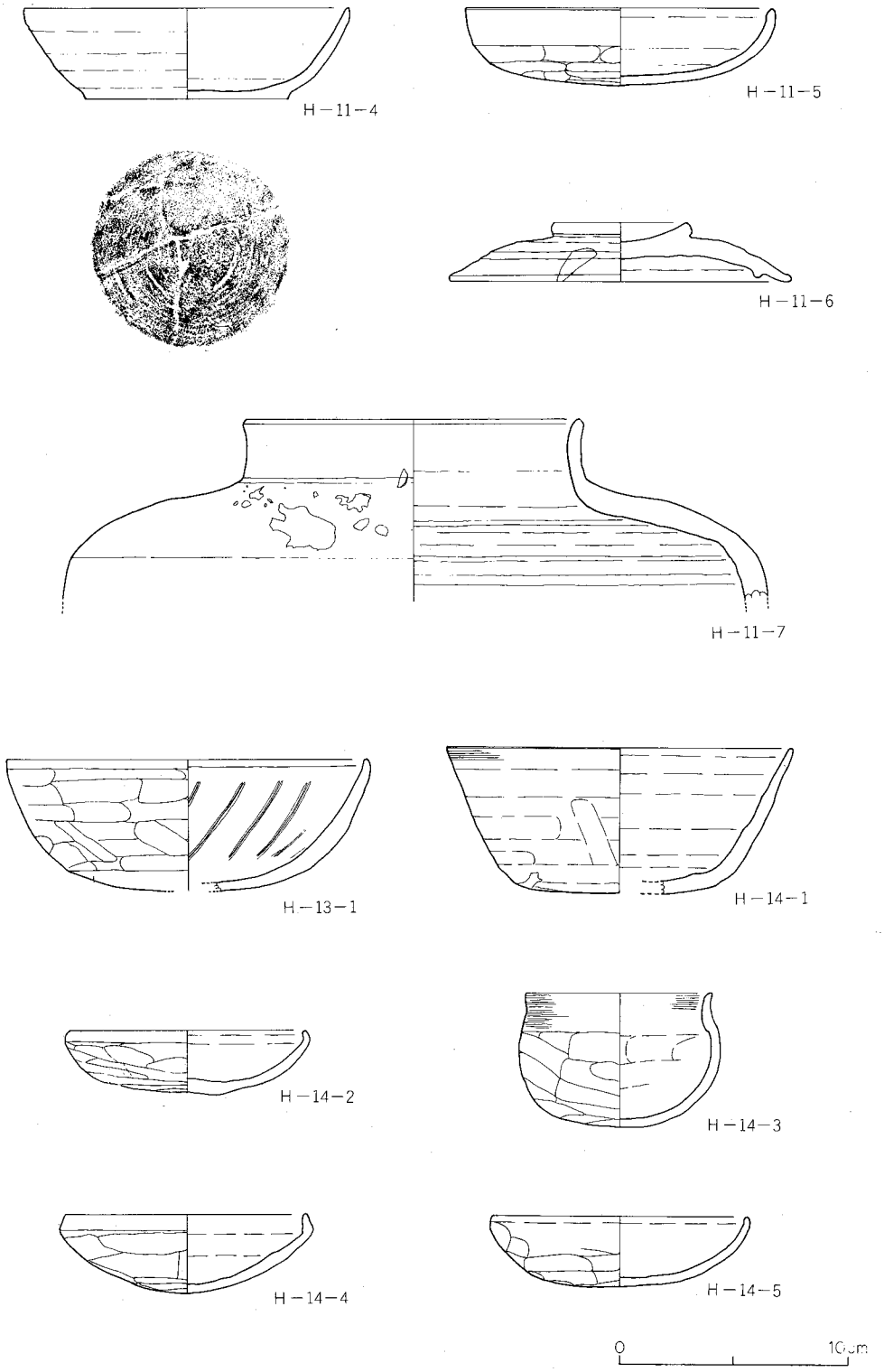


H－9－3

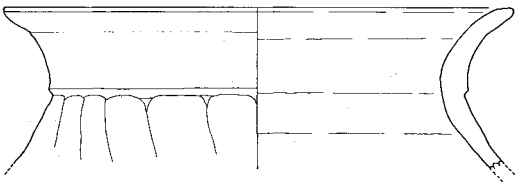
0　10cm

実測図 4

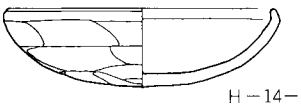



H－11－4
H－11－5
H－11－6
H－11－7
H－13－1
H－14－1
H－14－2
H－14－3
H－14－4
H－14－5
0
10cm

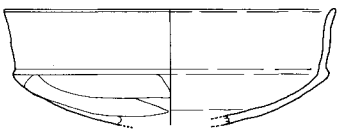
実測図 6



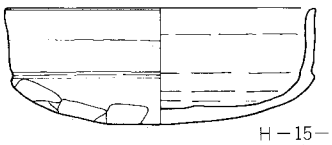
H－14－7



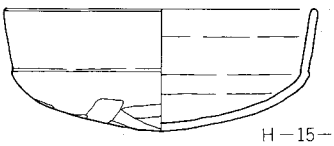
H－14－6



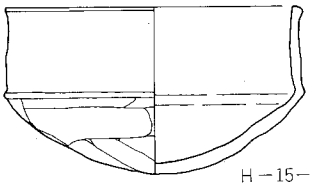
H－14－8



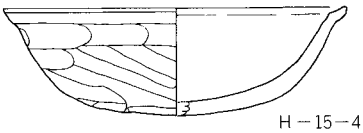
H－15－1



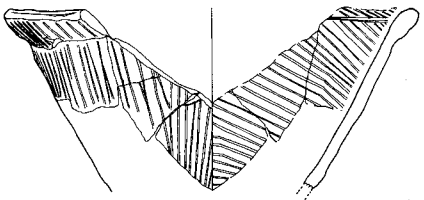
H－15－2



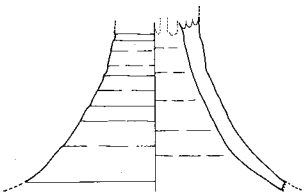
H－15－3



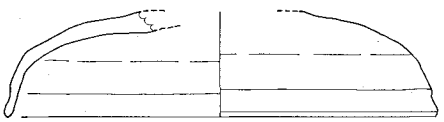
H－15－4



H－16－1

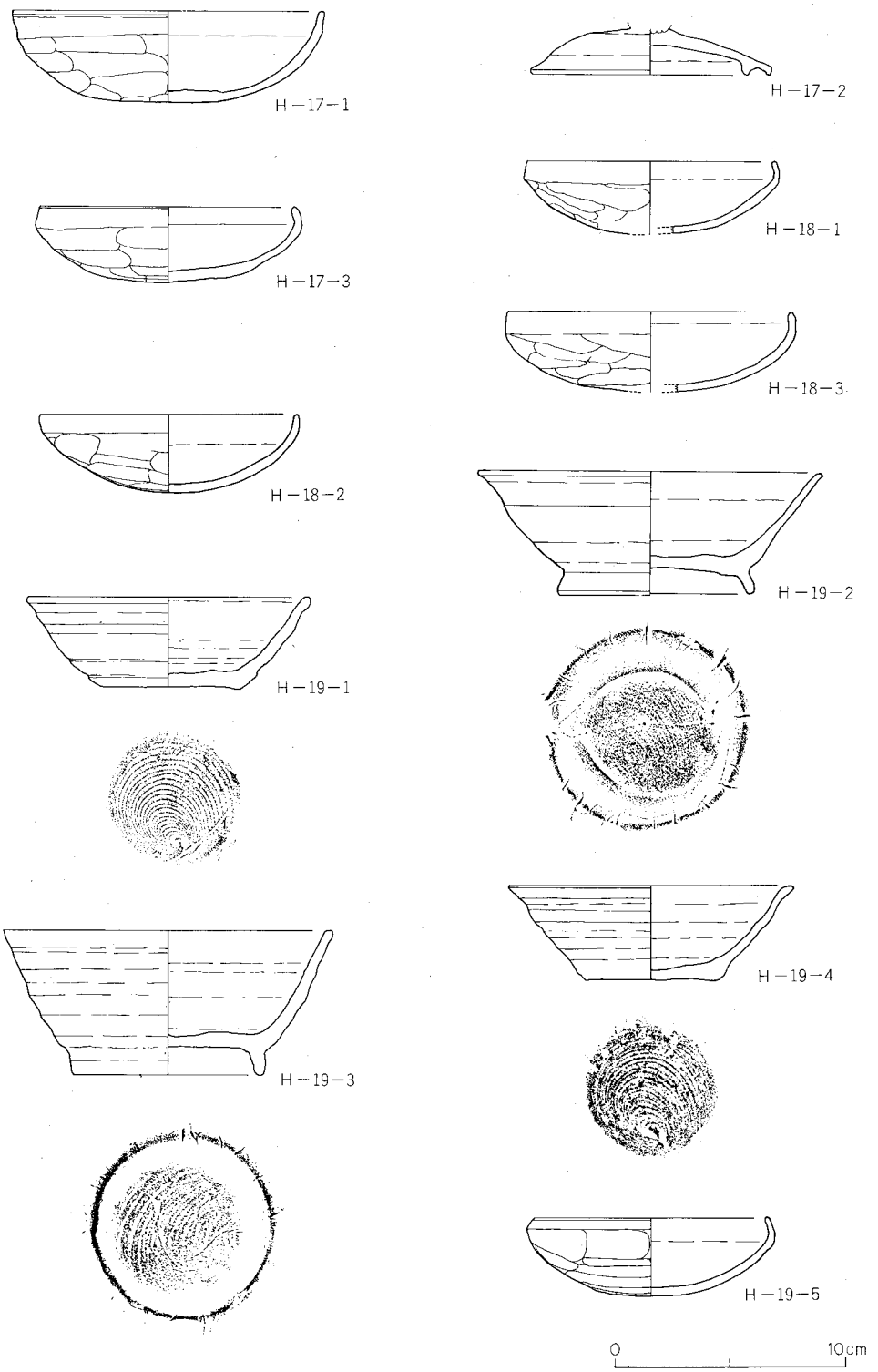


H－16－2

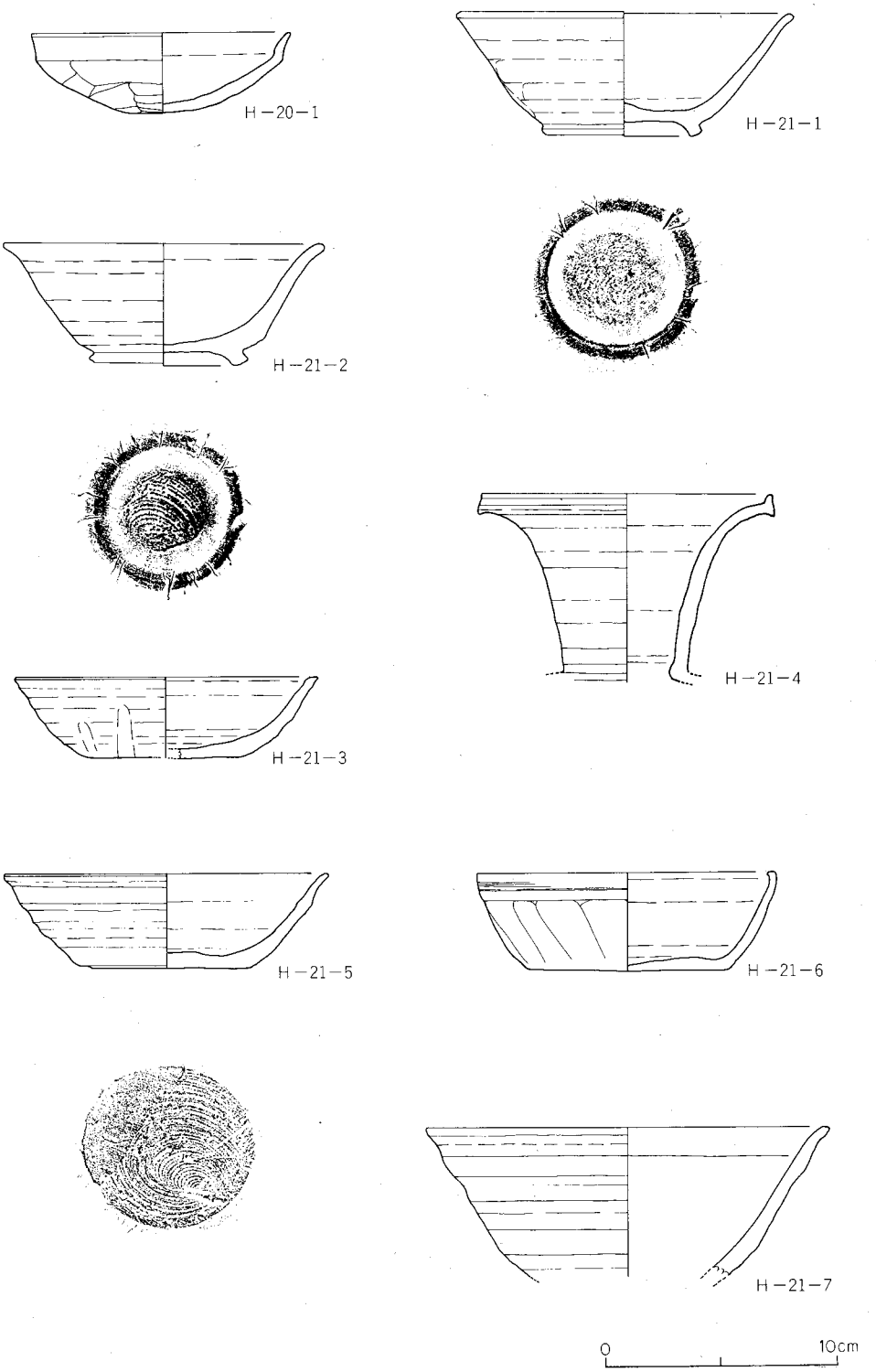


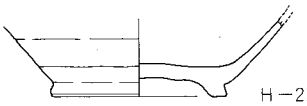
H－16－3

0　10cm

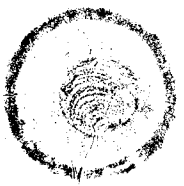

H－17－1
H－17－2
H－17－3
H－18－1
H－18－3
H－18－2
H－19－2
H－19－1
H－19－4
H－19－3
H－19－5
0
10cm

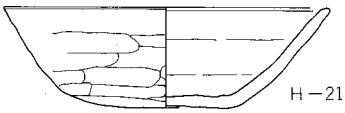
実測図 8



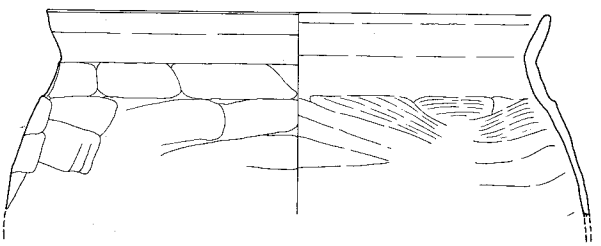


H－21－8

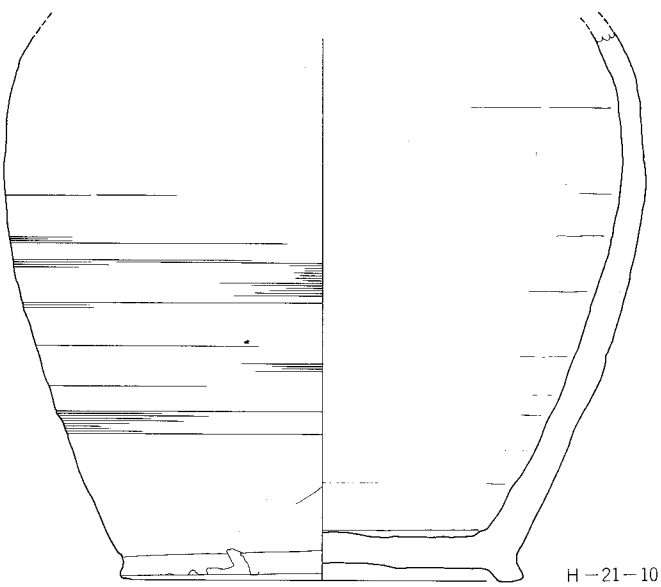




H－21－11



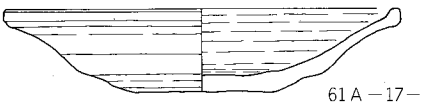
H－21－9



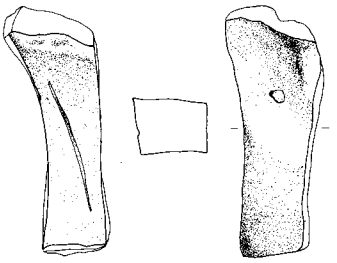
H－21－10

0　10cm

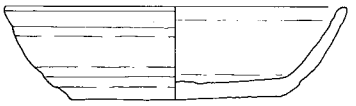
実測図10



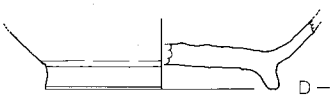
61A－17－1



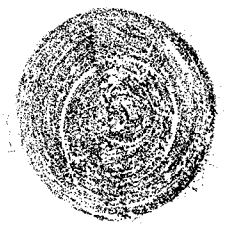
61A－17－2

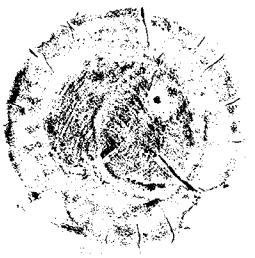


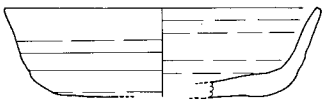
D－2－1

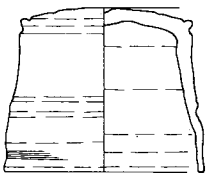


D－5－1

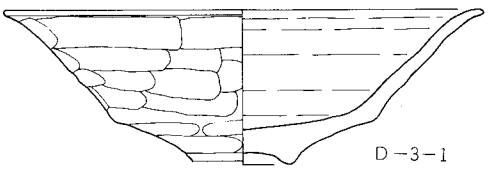






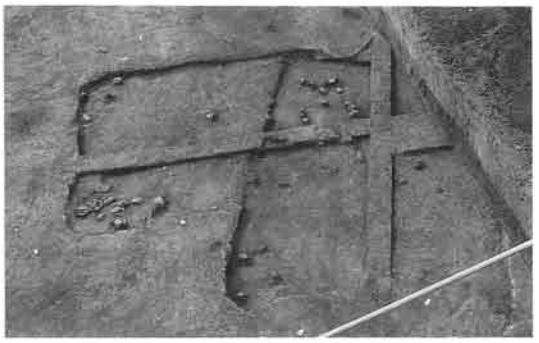


E－7－1



D－3－1

0　10cm



H－1、H－2　遺物出土状況

H－1、H 2

H－1　カマド

H－1　土製支脚

H－2　カマド

H－3、H－4、H－5、H－8

H－3　カマド

H－4　カマド

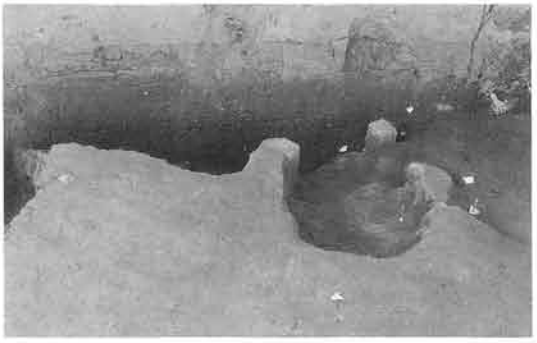
図版 2

H－5　カマド

H－6　遺物出土状況

H－6　遺物出土状況

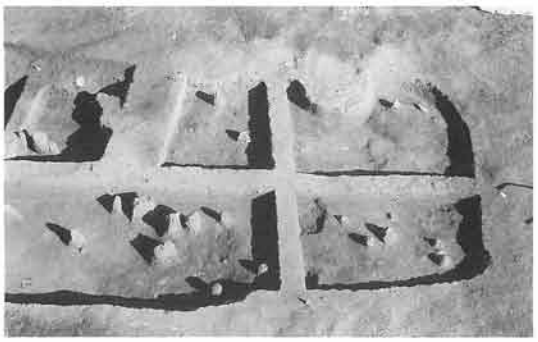
H－7　カマド



H－7

H－8

H－8　カマド



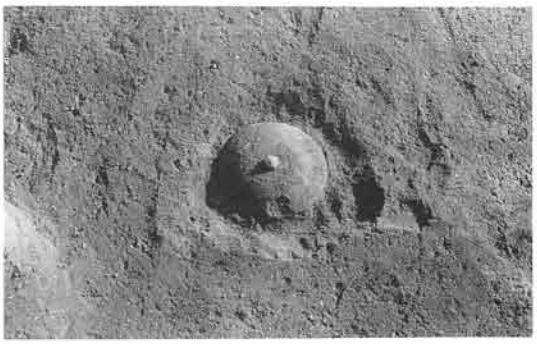
H－9、H－13　遺物出土状況

H－9　カマド

H－13　カマド

H－10　遺物出土状況

H－10



H－10　遺　物

H－11　遺物出土状況

H－11

図版 4

H－14、H－15　遺物出土状況

H－14、H－15

H－14　カマド

H－15　カマド

H－16　遺物出土状況

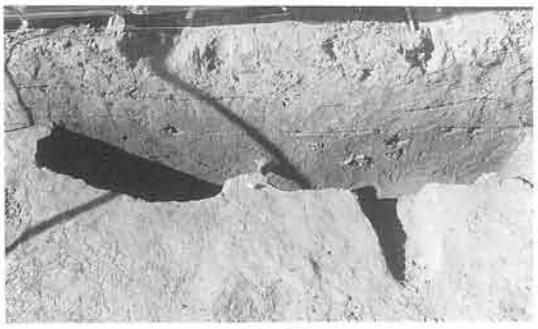
H－18　遺物出土状況

H－18　カマド

H－19　遺物出土状況

H－19

H－19　遺　物



H－20

H－20　カマド

H－21　遺物出土状況

D－1

D－2　遺物出土状況

D－3　遺物出土状況

図版 6

D－7、E－7　遺物出土状況

堀全景

土器群

堀セクション

土器群

試掘　1

試掘　2

H 2 − 1

H 2 − 2

H 3 − 1

H 4 − 1

H 6 − 1

H 6 − 2

H 6 − 3

図版 8

H 6 − 4

H 6 − 5

H 6 − 6

H 6 − 7

H 6 − 8

H 6 − 9

H 6 −10

H 6 −11

H 6 −12

H 6 −13

H 7 − 1

H 7 − 2

H 7 − 3

H 7 − 4

H 8 − 1

H 9 − 1

図版10

H 9 − 2

H 9 − 3

H 9 − 4

H 9 − 5

H10− 1

H11− 1

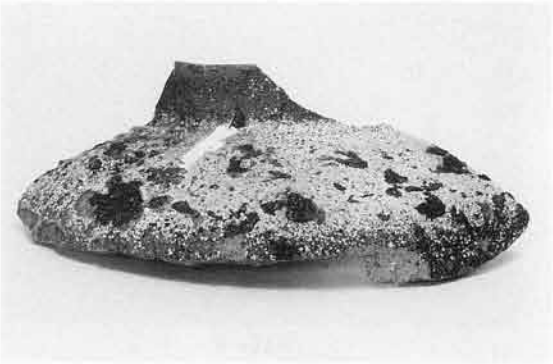
H11− 2

H11－3

H11－4

H11－5

H11－6



H11－7

H13－1

H14－1

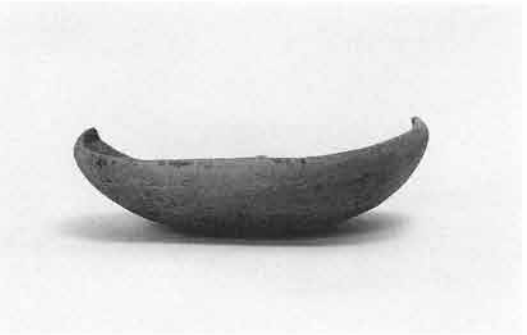
H14－2

図版12

H14－3

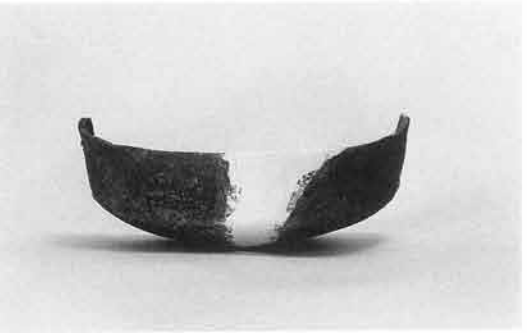
H14－4

H14－5



H14－6

H14－7



H14－8

H15－1

H15－2

H15－3

H15－4

H16－1

H16－2

H16－3

H17－1

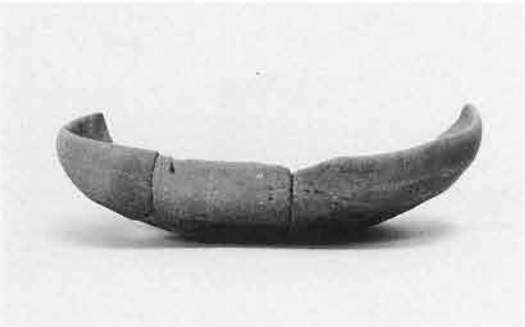
H17－2

H17－3

図版14

H18－1

H18－2



H18－3

H19－1

H19－2

H19－3

H19－4

H19－5

H20－1

H21－1

H21－2

H21－3

H21－4

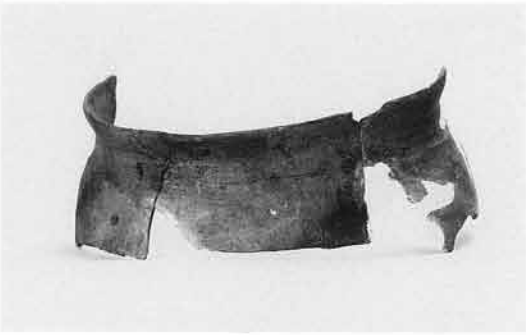
H21－5

H21－6

H21－7

図版16

H21－8



H21－9

H21－10

H21－11

D 2－1

D 3－1

D 5－1

E 7－1

村　東　遺　跡

昭和63年７月20日　印刷
昭和63年７月25日　発行

編集　スナガ環境測設㈱
発行　前橋市教育委員会
　　前橋市埋蔵文化財発掘調査団

印刷　上毎印刷工業株式会社